

令和2年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報 告 書

令和3年3月

公益社団法人日本写真家協会

1 はじめに

令和2年度は新型コロナウイルス感染者の拡大であらゆる分野や業種で、かつて経験したことがない規模と広がりにより、わが国の事業活動の大半が自粛するか休業するかの大波に見舞われた。

日本写真保存センターの活動も写真原板収集や外部調査活動は自粛し、セミナーなど対外的な広報活動は休止という事態に陥ってしまった。目に見えないウイルスの感染という不気味な病原体に不安が増幅され、1年を通じて世間と同様に落ちつかない日々が続いた。

本年度の保存センターの活動は、事業計画書が確定し予定した写真原板の収集活動に取り掛かろうとした矢先に最初の緊急事態宣言が発せられ、写真家やその家族との面会、自宅訪問しての写真原板確認といった不要不急の仕事は遠慮するという事態になった。ただ、社会での自粛状態が緩和されたタイミングで、少数ながら数名の写真家の写真原板を収集することができたのは幸いであった。

一年間の活動の主軸を、すでに寄贈・寄託され手付かずのままであった写真原板の調査、クリーニングや保存のためのメタデータ入力といった作業に注力した。そのため、国立映画アーカイブ相模原分館へのフィルム入庫本数は前年比で2倍以上の本数を入庫し、総数で11万本を超えた。公開データベースで公開している写真点数も前年比2倍の約1万3千点にまで増やすことができた。

今後の活動もコロナ禍が一段落しないと、昨年度までのような原板収集活動や対外的な広報活動はできないかもしれない。しかしながら、今年度中止したセミナーや写真展開催の企画準備も進めつつ、当面は保存センターの作業の中心となる収集済みの原板の調査、保存作業をピッチを上げて進めていきたい。

2018年度に改正された著作権法による「授業目的公衆送信補償金制度」の実施が決まり、写真の利活用が急ピッチで始まろうとしている。強い関心を持ってお手伝いしたい。

田沼 武能（一般社団法人日本写真著作権協会会長）

目 次

1	はじめに	3
2	本調査の概要	6
2.1	調査研究テーマ	6
2.2	調査研究の趣旨	6
2.3	調査研究の内容	6
2.4	調査研究計画	6
3	調査研究の実施計画	7
3.1	業務題目	7
3.2	実施時期	7
3.3	当該年度における業務実施計画	7
4	業務実施体制	9
4.1	課題項目別実施期間	9
4.2	調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿	10
5	本年度収集・調査した写真原板について	11
5.1	本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数	11
5.2	本年度収集・調査した写真原板 総論	13
5.3	調査した写真原板詳細	15
5.4	岩波写真文庫原板資料群調査状況中間報告	18
5.5	渡辺義雄 写真界の重鎮の遺したもの（総括編）	25
6	本年度行った写真原板データベースの改良	37
6.1	本年度作業概要	37

6.2 本年度作業詳細	37
7 情報発信、その他	43
7.1 本年度の情報発信と利活用	43
8 支援組織	45
8.1 日本写真保存センターと支援組織について	45
8.2 支援組織の経緯について	46
8.3 支援組織の支援内容について	46
8.4 支援組織の「台東作業分室の設置」支援について	47
8.5 日本写真保存センターの課題と支援組織の今後について	47
9 まとめ	48
図 版	49

2 本調査の概要

2.1 調査研究テーマ

文化的、歴史的に貴重な写真原板（フィルム及び乾板等）が散逸、遺棄されつつある現状を防ぐため引き続き、写真原板の収集・調査を行うと同時に、2011年度から実施している「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」を行い、利活用に適した閲覧用のデータベースの実現を目指す。

2.2 調査研究の趣旨

わが国の貴重な文化財および日本人の暮らしや日常を撮影した写真原板の収集・調査と、収蔵写真原板の利活用を行うためのデータベースの構築を行う。

利活用を行うための閲覧・検索用のデータベースの運用を円滑に行うための調査研究を行う。

2.3 調査研究の内容

データベースの運用にあたっての課題を明らかにするため、以下について調査研究を行い、運用の適正化並びに利活用にあたっての方策を検討する。

2.4 調査研究計画

① 諮問会議の実施

調査研究を行うにあたり、写真史、保存技術、権利処理、利活用、アーカイブに関わる専門家による諮問会議を実施し、当施設の基本理念、具体的な活動方針を図るための会議を開催する。

なお、データベースの構築および保存技術については、専門家による分科会を設け作業を進める。

② 調査委員会の設置と写真原板の収集保存

調査委員会を立ち上げ、写真原板所有者の元を訪ねて写真原板の収集を図る。

すでに行ってきた1945年から1970年代の収集、調査に加え、1945年以前の写真原板の収集も行い、わが国の歴史的に重要な時代の世相をとらえた写真記録を積極的に収集し、写真の充実を図り内容に厚みを加え、利活用の利便性の向上を図る。

③ 写真原板の収集基準と保存方法

激動した時代の世相を記録した写真原板を重点的に収集する。

収集する原板は写真集や印刷物等で公表されたものを優先する。

収集した原板はクリーニング、調査を行い完了した原板を中性紙の包材に入替え、長期保存を図るため、国立映画アーカイブ相模原分館のフィルム保管庫で保存する。

④ 写真原板の利活用

写真原板のデータベースを構築するために、近現代史に詳しい人材の登用を図り、内容の充実を行う。

データベースの利活用にあたっては、著作権等の権利処理を行い、公開、非公開などのほかに、近年とみに課題となっている被写体の肖像権や所有権などの権利についても研究を進め、公正な利活用の指針を構築する。

3 調査研究の実施計画

3.1 業務題目

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」
（「写真フィルムの収集保存・活用に関する調査研究」を含む）

3.2 実施時期

令和2年4月契約締結日から令和3年3月31日まで

3.3 当該年度における業務実施計画

（1）写真原板の収集調査

写真原板の収集は、前年度から引き続き1945年から1970年代のもの、1945年以前、1970年以降の時代を克明に記録した歴史的文化的に貴重な原板（写真フィルムとガラス乾板等）を対象とする。

これらを撮影した写真家の多くは既に物故されているため、遺族（著作権継承者等）および関係者、関係機関から収集を図る。

（2）原板の劣化

わが国は写真原板の長期保存には適していない環境であることは、これまでの調査活動で多方面で認知されるまでに至っている。

収集した写真原板は、チリや埃をクリーニングし、フィルムの劣化（ビネガーシンドローム）の有無をA-Dストリップ検査紙を使って調べ、レベル0.5以下の原板を中性紙の包材に交換して収蔵している。A-Dストリップレベル0.5を超えるものは、乾燥した空気のもとで酢酸臭を飛ばし、保存するかどうかの判定を行ったうえで、長期保存対策を施し収蔵を図る。

（3）原則寄贈から一部寄託へと収集範囲を拡大

保存センターが収集する写真原板は、原則寄贈としているが、所有者（撮影者の遺族等）によっては寄託を望む声もあるところから、重要原板については寄託を容認して受け入れる。寄託期間は数年程度とし、それ以降は寄贈に切り替えられるように要望している。

一方で、著作権や所有権等の権利関係については適宜契約内容の見直しを進めていく。

（4）写真原板の密着（コンタクトプリント）

収蔵する前に、写真原板に何が写っているか撮影対象が何であるかが判定できるように、35ミリフィルムでは36枚を1単位として、原板をスキャニングして、コンタクトプリント（密着）を作成し、画像の内容を確認している。密着からは撮影者が現場でどのような行動をとったか、何を発見しどんな感動を覚えたかの印象を掴むことは、作家研究や作品の制作過程を研究するために必要な作業である。アーカイブでは密着は原則非公開であるが、特別な研究者等には保存センター内で閲覧できるようにしている。

(5) アーカイブ構築に向けてのデータベース

平成26年度から整備を進めている検索システム「SAI-CHI」について、収集している写真原板のデータベースの基本は管理用データベース（写真原板台帳）を構築することが必要で、これを元に公開、閲覧用のデータベースを作成し、ネット上での閲覧、検索が行えるようにしている。

毎年、ソフト運用の確認を行い、データ入力時の問題点や利用者が閲覧する際の利便性を優先した改良を行っている。

(6) 写真原板の利活用と広報

日本写真保存センターの活動内容をフィルムを所蔵している写真家や遺族、関係者、写真原板を取り扱う関係機関などに広く知っていただき、貴重な写真原板が散逸、遺棄されないようにしていかなければならない。

また、収集した写真原板をただ長期保存するだけでなく、現代において改めて教育や報道、展覧会、出版など様々な場面で多くの人々の目に触れるように利活用を促していく必要がある。そのための広報活動を進めていく。

ただ、今年度は、新型コロナウイルス感染者拡大により、計画していたセミナーなどの対外的な活動は全て自粛せざるを得なかった。

今後は、これまでに収集した写真原板を利用した写真展を開催したり、恒例の印刷技術協会主催イベント「page展」でのセミナーなど、日本各地でイベントを実施していきたい。そこでは、保存センターの活動内容と写真原板の劣化予防対策や保存の重要性、利活用につながる「データベースの活用」についてもアピールしていきたい。

松本 徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）

4 業務実施体制

4.1 課題項目別実施期間

実施月	事 項	概 要	詳 細
4月	会議	諮問調査委員会	令和元年度事業報告・令和2年度年間計画(資料配布のみ)
	会議	支援組織	令和元年度事業報告・令和2年度年間計画(資料配布のみ)
6月	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	会議	関係者合同会議	令和2年度原板収集計画
	収集	写真原板の収集	岡村 崔
	会議	情報発信	「岩波写真文庫」画像データ活用協議
7月	会議	データベース	令和2年度データベース改修項目の協議
	会議	関係者合同会議	収集目標とする写真家の選定
	収集	写真原板の収集	佐伯義勝
8月	収集	写真原板の収集	芸艸堂、杵島隆
	権利処理	寄贈契約の締結	芸艸堂
	会議	関係者合同会議	収集目標とした写真家との交渉状況の確認
9月	収集	写真プリントの収集	渡辺義雄
10月	会議	諮問調査委員会	令和2年度上半期報告・下半期の計画
	会議	支援組織	令和2年度上半期報告・下半期の計画
	収集	写真原板の収集	渋谷高弘
	権利処理	寄贈契約の締結	渋谷高弘
	調査	写真原板の調査	広島原爆写真
	会議	関係者合同会議	収集目標とした写真家の見直し
11月	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	会議	情報発信	テレビでの写真原板の利活用について制作会社と協議
	収集	写真原板の収集	清宮由美子
1月	権利処理	寄贈契約の締結	清宮由美子
2月	収集	写真原板の収集	山崎美喜男
	権利処理	寄贈契約の締結	山崎美喜男
	会議	データベース	データベース本年度分改修作業
3月	保存	写真原板の収蔵	国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫への収蔵
	報告	報告書作成	令和2年度事業報告

4.2 調査研究にあたる諮問・調査委員、補助員、調査員名簿

事業実施体制

公益社団法人日本写真家協会

統括部門

代 表	田沼 武能(一般社団法人日本写真著作権協会会長)
	野町 和嘉(公益社団法人日本写真家協会会長)
	松本 徳彦(公益社団法人日本写真家協会副会長)
	山口 勝廣(公益社団法人日本写真家協会専務理事)
	飯島 幸永(公益社団法人日本写真家協会常務理事)
	瀬尾 太一(一般社団法人日本写真著作権協会常務理事)

諮問・調査委員会

諮問・調査部門

委 員	金子 隆一(写真史家)
委 員	北村 行夫(虎ノ門総合法律事務所・弁護士)
委 員	大亀 哲郎(日本ユニ著作権センター企画室主任研究員)
委 員	高橋 則英(日本大学芸術学部特任教授)
委 員	多田 亜生(元岩波書店美術書編集者)
委 員	田良島 哲(東京国立博物館特任調査官)
委 員	丸川 雄三(国立民族学博物館先端人類科学研究部准教授 国立情報学研究所准教授)
委 員	山口 孝子(東京都写真美術館保存科学専門員)
委 員	吉田 成 (東京工芸大学芸術学部写真学科主任・教授)
補助員	内堀 タケシ(公益社団法人日本写真家協会会員)
補助員	寺師 太郎(公益社団法人日本写真家協会会員)

調査作業部門

事務局長	山崎 正典
調査員	河原 健一郎
調査員	幸田 沙也子
調査員	鈴木 博憲
調査員	高田 しのぶ
調査員	中辻 利枝子
調査員	笛木 諭
調査員	渡邊 英雄

5 本年度収集・調査した写真原板について

5.1 本年度の写真原板受入数及び相模原入庫数

5.1.1 写真原板資料受入概要

本年度は8名・団体、約12,240点の写真原板資料を受け入れた。写真原板資料の概要は表1の通り。受入数は初期調査時の概数で記す。なお、西川孟の写真原板資料は昨年度の3月に受け入れたが昨年の報告書への掲載が間に合わなかった為、今年度の報告書に掲載した。各原板資料の詳細は5.3で紹介する。

表1 令和2年度写真原板資料受入概要

撮影者・団体名	受入日	受入数		概要
		初期調査未 点数	初期調査済 点数	
西川孟	2020年3月12日 3月19日 3月24日	8,729	—	日本の歴史的な建築物や工芸品等
岡村崔	6月29日	—	1,556	イタリア、ギリシャの歴史的建造物
佐伯義勝	7月16日	—	13	1959年伊勢湾台風被災状況
杵島隆	8月3日	—	194	写真集『義経千本桜』歌舞伎、文楽
芸艸堂	8月13日	—	391	『東洋花鳥写真集』動之巻第19輯等
渋谷高弘	10月19日	—	618	昭和30年前後の東京などの都市
清宮由美子	11月23日	—	735	1950～60年の東京や1970年前後のヨーロッパ
山崎美喜男	2021年2月5日	—	4	1961年に市川市八幡神社で行われた農具市
合計8名		8,729	3,511	

5.1.2 国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫内容

本年度の相模原フィルム保存庫への写真原板の入庫作業は2020年6月11日、11月12日、2021年3月11日の3回行い、計21,247点を収めた。写真原板の入庫内容を表2に記す。

表2 令和2年度写真原板入庫内容

撮影者名	入庫原板数
渡辺義雄	2,237
秋山忠右	1,697
岩波写真文庫	4,910
奈良六大寺大観	10,207
山口直	174
片山攝三	2,022
合計6名	21,247

5.1.3 年度別各作業処理数

日本写真保存センターはこれまで83名・団体、約344,678点の写真原板資料を受け入れた。そのうち国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫へ収めた写真原板は112,277点。未処理の写真原板は232,401点。年度別の各作業処理数は表3の通り。また、調査を開始してから現在までにデジタル化した写真原板の数は51,185点になった。

表3 年度別各作業処理数（2021年3月12日現在）

年度	写真原板受入数	相模原入庫数	未処理数
平成21年度	28,712	—	28,712
平成22年度	25,626	—	54,338
平成23年度	41,203	—	95,541
平成24年度	4,470	8,901	91,110
平成25年度	3,523	15,139	79,494
平成26年度	40,258	24,179	95,573
平成27年度	61,523	7,210	149,886
平成28年度	11,000	5,263	155,623
平成29年度	91,551	9,229	237,945
平成30年度	343	12,608	225,680
令和元年度	24,229	8,501	241,408
令和2年度	12,240	21,247	232,401
合計	344,678	112,277	232,401

笛木 諭（調査員）

5.2 本年度収集・調査した写真原板 総論

芸艸堂

京都市中京区寺町通り二条南にある染色図案、画譜の老舗として知られている「芸艸堂」を訪ね、明治末期から昭和初期にかけて使われた「木版画」の元資料として撮影されたガラス乾板の調査を行った。お店の裏にある版木や資料を納めた土蔵を検分する。床から天井まで5メートル近くある棚に、版木が新聞紙にくるまれて積み上げられている。

ガラス乾板は、英国のイルフォード社製や富士フィルム社製で、下層の棚に置かれていた。また別の棚には大正期に印刷された岡本東洋の「白鳥黒鳥」写真集や「動物」を撮った画集が積み重ねられていた。

そこから10×12と5×7インチサイズのガラス乾板391点を収集した。

芸艸堂の歴史は古く、山田吉兵衛が隠居後、1887（明治20）年に、長男の市次郎と三男の金之助が雲錦堂を興し、染色図案集を出版する。1891（明治24）年に次男の山田直三郎によって木版画印刷を制作する美術出版社として創業した。京都は友禅や西陣の豪華な織物店が多数存在したため、それらの図案集を出版、販売することで繁盛した。

また画家たちの下絵や動物や人物などの動態を描くための手本として写真が利用されて来た。蔵には当時からの資料や版木など数万点が残されており、名高い彫師や摺師による作品集など今日もなお出版が続いている。

松本 徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）

渋谷高弘 元日本写真家協会会員。現在会友。

ドキュメント写真は、現実を捉えた非演出の偽りのない映像記録であり、一つの時代を振り返り検証する上で極めて貴重な歴史的資料といえる。そのことを考えながらスナップ写真を中心として戦後の社会を撮影してきた写真家渋谷高弘氏の作品群を見る時、敗戦の焦土から立ち上がり今日の繁栄に至った日本の姿を知る上で優れた記録性の高い写真である。

渋谷高弘氏は1925（大正14）年東京本郷生まれ96歳である。昭和とともに歩いてきた氏は日本大学芸術学部写真学科を卒業しタブロイド版のサン写真新聞社写真部員を経てフリーとなり今日まで70年有余の現役でもある。雑誌のグラビアページを中心に写真と文のルポで数々の作品を発表してきた。また一方で日本各地を旅行しながら趣味の釣りや料理を取材し数多くの写真とエッセイ発表する多才な一面もある。

今日まで多くの展覧会を開き写真集も制作している。例えば2014（平成26）年JCIIフォトサロンで開催した渋谷高弘作品展、一なつかしい東京「昭和写真帳」の図録を見ると、表紙には1955（昭和30）年、戦後の民間航空として国際線ターミナル開設披露宴の際、飛行場に展示された飛行機とともに17人のスチュワーデスの一列に並んだデビューが写されている。終戦後10年を経て高度経済成長に入った世相を反映してか、彼女らの堂々と闊歩する姿から時代の息吹が伝わってくる。この写真は、そんな一コマを象徴している一枚である。

内容をいくつか紹介すると、ローアングルで写した銀座4丁目の「傷だらけの銀座4丁目」は、東京大空襲で傷んだ剥き出しの道路（昭和29年）だ。また、第一回日比谷公園―東京モーターショーや東京駅で和服姿の婦人たちの見送り風景、懐かしい駅弁売りなど。更にまだ高速道路が架かってなかった日本橋（昭和23年）や今日には想像できない証券取引所で働く和服姿の事務員や黒板に株価を手で書いている女性（昭和24年）や進駐軍のために英語で書かれた道路標識がある新橋、銀座界隈の風景（昭和21年）や、まだ運河があった京橋川の水上生活者の仕事と食事風景まで撮影している作品もある。さらに築地、池袋、渋谷、品川、麻布十番などそこに暮らす人々の普段着の生活が細かく写されている。

これらは戦後社会の一時期を捉えた貴重なスナップとして社会学的にも大衆文化を知る上でも価値の高い記録性を持った作品群といえる。次にフォト・エッセイ“昭和のワンダーランド”そして平成へ「浅草いまむかし」を見てみると、昭和20年代から平成のスカイツリー時代まで、多彩な貌を見せる約70年間の浅草風俗のスナップが記録されている。昭和20年代の六区から昭和60年代そして現代に至るまで細かく対象を撮影して当時の人間模様を描き出している。例えば隆盛を極めた大江美智子一座の女剣劇の賑わいや仲見世から伝法院通り居酒屋と続く懐かしい浅草の風景や人物などに加え、当時の老舗の店構え、西の市、羽子板市、ほおずき市、大道芸人、神谷バー、浅草から見たスカイツリーなど身近な被写体を手に取るように写している。珍しいのは浅草ロック座の楽屋で作家永井荷風と踊り子のスナップが撮影されていてまさに浅草現代史を見るようである。このほか写真帳「銀座」の記憶（平成16年）、「50年前の熱海」（平成16年）、「50年前の東京」（平成16年）、「50年前のハワイ」（平成20年）などを発表し、スナップ写真70年の重みを感じる内容で日本写真保存センターでは618本の写真原板を寄贈受け保存管理にあたっている。

清宮由美子 元日本写真家協会会員。平成30年逝去。

“カメラマンである以上、だれしものが、自分の納得いく写真を撮りたい、飾りものでない何か真実なものを、写真を通して人々に訴えることができたなら…”、とあとがきに記した写真家清宮由美子は、写真集「日本のどこかに」（鏡浦書房・1961年）で、ドヤ街の日常を描いたヒューマンドキュメントを発表した。東京都江東区深川高橋のドヤ街をルポしたこの写真集には底辺にいる人間が、生きる、とは何か、を問う清宮由美子の眼で鋭く切り撮った映像記録である。昭和35年の夏、27歳の彼女はドヤ街の一角に住み込み、都会の片隅に迫いやられ世間から見向きもされることもなく明日に希望のない生活者の人間群像を追い、写真の記録性を以て偽らざる光景を描き出した。

全体に流れる粗粒子で濃いモノクロの調子は、例えば橋の下で暮らす老人の惨めな生活がリアルに表現され、日々の切迫感が強調されている。また、毎朝何千人とその日の糧を求めて集まる日雇い労務者ニコヨンの群れや破れた風呂敷に全財産を入れて立つ老人やボロ着を纏った幼子たちの様々な姿、お正月の粗末な着物姿の子供や首つり自殺の真似をしている子供の後ろ姿などは、ドキュメンタリーの持つ写実的映像で迫力がある。ユッ平という子供を追った写真では、モク拾いや金になる針金の屑鉄拾いの姿、垢だらけで鼻水を垂れた顔のアップ、学校にも行けず一人寂しく壁に立つ姿など、どの写真もドヤ街に住む人々の深奥に肉薄している。

ここまで撮れるということは、人々が清宮に心を許している証拠で親愛の情すら感じるが、一見写す側と撮られる側とに何の抵抗もなく見える。が、住民は彼女にまったく無関心で何処を撮られても平然としている感じだ。彼女は何を訴え、何を伝えようとしたのか。冒頭の彼女の言葉が全てで記録された現実が真実であることは否定できない。フィルムには細かな情報が記録されていて写されているものを恣意的に解釈したり消したりしないだけに事実重い。それが写真家の総力をかけた力量と報道写真家としての姿勢に現れてくる。

1960年代は高度経済成長期でもあり1964年の東京オリンピック開催を目指してインフラ整備で何処も工事が盛んで日本全体が活気づいていた。しかし貧富の差は激しく日本の至る所にドヤ街が存在し、その日をどうにか生きていく生活者の群れがあった。この現実に取り組んだ清宮は、時代が照らす光の部分より影の部分にレンズを向け、誰を恨むこともなく貧しく生きる人々の日常を切り撮った。この時代は報道写真の全盛期でもあった。

清宮由美子は、昭和9年長野県生まれ。4歳から東京で育ち昭和30年東京写真短期大学（現・東京工芸大学）を卒業。平凡出版写真部、光文社「女性自身」写真部を経て昭和36年フリーとなる。女性写真家の草分けの一人として男性カメラマンに混じり、当時皇太子様であった現上皇様のお妃となった正田美智子様のご婚約からご成婚までの1000日間を撮影した。その集大成の写真集「美智子妃誕生と昭和の記憶」（講談社・

2008年)は、皇室の新しい風、として昭和史を飾る一冊となっている。

これらは女性写真家の存在が込められた貴重な作品群である。

飯島 幸永 (公益社団法人日本写真家協会常務理事)

5.3 調査した写真原板詳細

5.3.1 新規受け入れ

芸艸堂(うんそうどう) 1891(明治24)年 - 京都府にて創業。

江戸時代より続く、日本で唯一の手摺木版による和装本専門の出版社。明治から昭和初期にかけて、伝統木版の高い技術力による多色摺の木版画譜および図版集を多数出版するほか、着物図案の収集を手がける。

主な出版物:『花鳥写真図鑑』(芸艸堂 1930年)、『芸術資料』(芸艸堂 1936年)、『茶道精観』(芸艸堂 1947年)。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2020年8月13日に、キャビネ判ガラス乾板を中心に、391点を受け入れた。

○原板の内容

岡本東洋の『東洋花鳥写真集』動之巻 第19輯に使用されたと思われる、動物が撮影されたもの、歌舞伎・神楽で用いられる衣装の着こなしや見得、しぐさ、武士の衣装など人物のポーズが写されたもの。

○原板の状態

ほぼすべてのガラス乾板に埃などが長年積層されたような汚れがあった。また、数点のガラス乾板は端が割れていた。

渋谷 高弘(しぶや たかひろ) 1925(大正14)年 - 東京都生まれ。

日本大学芸術学部卒業。サン写真新聞社写真部を経て、フリーランスとして活動。主にグラビアを手掛けるほか、紀行、ルポなどを新聞・雑誌に寄稿する。日本旅行作家協会顧問理事、日本写真家協会会員、東京・レジャー記者の会会員。

主な写真集:『お魚列島うま味旅』(日地出版 1993年)、『こんなにおいしい日本列島』(廣済堂出版 1997年)。

主な写真展:「50年前の浅草」(浅草ビューホテル 2003年)、「50前の熱海」(熱海シーサイド スパ&リゾート 2004年)、「50前のハワイ」(いわき市スパリゾートハワイアンズ フラ・ミュージアム 2008年)。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2020年10月19日に、中判モノクロネガを中心に、618点を受け入れた。

○原板の内容

戦後から1960年代ごろの東京を中心に日本の都市部を撮影した原板が多い。発表された作品である『「浅草いまむかし」』、『「銀座」の記憶』、『渋谷高弘作品展「一なつかしい東京 一昭和写真帖」』に使用された原板が存在する。

○原板の状態

数点の135判モノクロネガフィルムにカーリングが発生していた。

清宮 由美子(きよみや ゆみこ) 1934(昭和9)年 - 2018(平成30)年 東京都生まれ。

1955年東京写真短期大学卒業。出版社勤務を経て、1957年、週刊誌『女性自身』に携わる。皇室係要員として活躍しながら、『新週刊』、『アサヒカメラ』、『日本カメラ』、『太陽』などに携わる。1960年代後半よりイギリスに渡航し、現地のスナップ写真を写真誌に掲載。雑誌社の女性カメラマンの草分け的存在である。

主な写真集：『日本のどこかに：清宮由美子写真集』（鏡浦書房 1961年）、『美智子妃誕生と昭和の記憶：プリンセスに密着した女性カメラマンの一〇〇〇日』（講談社 2008年）。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2020年11月23日に、135判モノクロネガを中心に、735点を受け入れた。

○原板の内容

1950～60年代の東京（江東区、墨田区）や1970年前後のヨーロッパ（ロンドン、パリなど）を撮影した原板が多い。発表された作品では『日本のどこかに』『OTOKO JOY Vol.5 London Report』に掲載された原板が存在する。

○原板の状態

著しい劣化は見受けられなかった。

山崎 美喜男(やまざき みきお) 1940(昭和15)年 - 千葉県生まれ。

1960年多摩芸術学園写真科卒業。1962年、コマーシャルスタジオ設立に参加。1980年、株式会社スタジオアルファを新宿区に設立。家電、照明器具、オーディオ製品、半導体製造装置、NHK「シルクロード」のスチール撮影等に従事。日本写真家協会会友、市川写真家協会理事。

主な写真集：『アルプス気球の旅』（日本放送出版協会 1979年）、『ライン河の旅：源流から北海まで』（日本放送出版協会 1979年）、『写真集シルクロード：ローマへの道』（日本放送出版協会 1984年）、『昭和三十六年市川市八幡神社 農具市』（2020年）。

写真原板の特徴

○受入日と原板の数量

2021年2月5日に、135判モノクロネガ3点、120判モノクロネガフィルム1点の計4点を受け入れた。

○原板の内容

すべて、写真集『昭和三十六年市川市八幡神社 農具市』に掲載されたもの。

○原板の状態

135判フィルムにカーリングが見られる。

5.3.2 受入継続中の写真原板詳細

昨年度までに受け入れた写真原板のうち、本年度も引き続き受け入れを行った写真原板について記す。写真家のプロフィールは前年度までの報告書にて記載済みのため、写真原板の特徴のみを記す。西川孟氏の写真原板については、昨年度報告書の入稿後に受け入れを行ったため、本年度報告書に記載する。

西川 孟(にしかわ もう)

○受入日と原板の数量

2020年3月12日、第6回受け入れとして3,215本、2020年3月19日、第7回受け入れとして4,985本、2020年3月24日、第8回受け入れとして529本の、計8,729本を受け入れた。

○原板の内容

第6回受け入れが、TEA CEREMONY、高林家住宅、おやさま、四天王寺、西本願寺、第7回受け入れが、池坊専永、殉教、仙洞御所、桂離宮、西芳寺、修学院離宮、能装束、五島美術館、岡山美術館、春日大社 宝物、仁和寺、黒田辰秋・他 作家作品、風景、北海道、人形、浮世絵、第8回受け入れが、大阪万国博覧会1970年、鳥取砂丘、大空真弓、大覚寺障壁画、能装束、であった。

○原板の状態

カラーポジフィルムの一部に褪色が見られる。

岡村 崔(おかむら たかし)

○受入日と原板の数量

2020年6月29日、第7回受け入れとしてカラーポジフィルムを中心に1,556点を受け入れた。

○原板の内容

古代ローマからバロック、ルネッサンスにかけての、イタリア・ギリシャの建築や風景。

○原板の状態

カラーポジフィルムの一部に褪色が見られる。

佐伯 義勝(さえき よしかつ)

○受入日と原板の数量

2020年7月16日、第3回受け入れとして135判モノクロネガ13点を受け入れた。

○原板の内容

1959年の伊勢湾台風被災直後の風景。

○原板の状態

全体にビネガーシンドロームが進行し、一部には著しいカーリングが見られる。

杵島 隆(きじま たかし)

○受入日と原板の数量

2020年8月3日に、135判カラーネガを中心に、194点を受け入れた。

○原板の内容

『義経千本桜』の第2～4巻の歌舞伎、文楽に使用された原板。1971、78、79年に国立劇場で撮影された。

○原板の状態

著しい劣化は見受けられなかった。

河原 健一郎（調査員）

笛木 諭（調査員）

5.4 岩波写真文庫原板資料群調査状況中間報告

日本写真保存センターでは2017年8月に岩波写真文庫原板資料群の受入れを行い、2020年4月より、本調査2～3名、コマ調査1名体制での調査を開始した。本年度は、効率的な調査を行うためのワークフローを模索しながらの作業となった。

日本写真保存センターの写真原板調査では、原板画像とメタデータのデジタル化を行うだけでなく、写真の掲載された新聞・雑誌・写真集を特定し本文の記述や被写体から読み取れる情報を統合することで、写真一枚ごとに撮影場所、撮影日時といった詳細なメタデータを入力している。写真はその性質として、光として捉えられる全てを記録することが出来るといっても過言ではない。ありとあらゆるものが被写体となる可能性があり、そのイメージは圧倒的な具体性を持ちながらどこまでも抽象的であるともいえる。岩波写真文庫には、1950年代の日本全国の農村・都市の風景、風俗、産業、民芸、伝統芸能から、動植物、昆虫、科学実験に至るまでのありとあらゆる事象が掲載されている。これらの写真をアーカイブ化するにあたっては画像イメージと共に、メタデータの記録が非常に重要であるといえる。

一方で、後述する通り岩波写真文庫原板資料群は数量が膨大で、また調査にあたる調査員の人数には限りがある。本稿では、効率的かつ緻密な作業の両立を図るべく決定された調査方針の概要と、実作業の詳細について述べる。

岩波写真文庫の出版経緯や内容については、『岩波写真文庫の意義』（平成29年報告書 p.13）、『「岩波写真文庫」原板について』（平成29年報告書 p.16）を参照されたい。

5.4.1 岩波写真文庫原板資料群の概要

岩波写真文庫原板資料群は、1950～1958年にかけて出版された岩波写真文庫286冊に使用された写真原板として受け入れを行い、原板総数は約41,000点、原板の種別は、135判、120判、シートフィルム等であり、ほぼ全てがモノクロフィルムであった。

5.4.2 調査方針策定の経緯

原板の撮影内容について大まかに調査した結果、受入れ原板の一部に岩波写真文庫以外の書籍に掲載されたものが含まれることが判明した。他の書籍に使用されたと考えられる原板も岩波写真文庫に使用された原板と同様に貴重ではあるが、使用された書籍が多岐にわたる可能性が高く、これらの調査には膨大な時間を要する事が予想される。そのため、岩波写真文庫に掲載された写真原板の調査を優先して行い、岩波写真文庫掲載分の調査が終了した時点でその他の原板の調査を行う事とした。

岩波写真文庫に使用された原板とそれ以外の書籍に使用された原板とは、原板の収納方法や書き込み等から分別した。原板の収納方法は、プラスチック製収納棚に保存されているものと、ベークライト製事務箱に納められているものに大別される。

プラスチック製収納棚は少なくとも過去10年以内に製造されたものと推測され、これらは岩波書店の書庫の取り出しやすい場所に設置されており、出版などへの再使用に備えていた可能性が考えられる。また、棚の表書きには岩波写真文庫のタイトルに類似する書き込みがあった。

ベークライト製事務箱については、箱を開くことが困難なほど著しく腐食し、また収納されている原板にも著しい劣化が見受けられるものが多かったことから、出版物への使用後に再使用されることがなく、長らく同一の箱に収納されていたと推測される。撮影内容については美術品の複写やポートレート等が多く含まれ、書き込みにつ

いては岩波書店発行の、岩波写真文庫以外の書籍名が確認された。

以上から、受入れ資料のうちプラスチック製収納棚に収納されている原板、約23,000点に岩波写真文庫に使用された原板が多く含まれると予測し、優先調査範囲を決定するための確認作業を行った。



図1 原板収納状況 プラスチック製収納棚



図2 原板収納状況 ベークライト製事務箱



図3 プラスチック製収納棚



図4 ベークライト製事務箱の腐蝕

5.4.3 調査プロセスの概要と優先調査範囲の決定

保存センターの調査は大きく分けて、1) 初期調査、2) 本調査、3) コマ調査の順に行う。岩波写真文庫原板資料群に対しては優先調査範囲の内容を確認すべく、1) の作業後、2)、3) の作業を少数の原板に対してテスト的に行い、調査方針を決定した。

1) 初期調査

資料の現秩序や、概要・数量を記録する。具体的には、原板資料群の特徴を原板の収納状況やフィルムホルダーの書き込み、出版された写真集の情報などから捉えて調査の大方針を検討すると共に、収納状況を記録し資料一点ごとに個別の番号（ID）を付与する作業である。

初期調査作業は、2019年5～7月にかけて行った。IDを付与する段階で原板の収納されているフィルムホルダーの書き込みと岩波写真文庫のタイトルとを照合した結果、フィルムホルダーの書き込みには出版された本のタイトルの多くが含まれていると判明した。

2) 本調査

原板画像およびメタデータのデジタル化を行う。具体的には、原板スキャンを行い原板の画像を取得すると共に、フィルムホルダーへの書き込み内容や、写真文庫の出版に際して写真一枚ごとに付与されていた番号（以降、岩波書店元番号）、原板種別、劣化状態等を目録化する作業である。原板画像は、コンタクトプリントと同様の形態で取得する。（図7を参照）

原板の長期保存のために、無酸性紙製の包材への入れ替えも行う。

2019年7～8月にかけて約186本に対して、調査範囲決定のための先行調査を行った。

3) コマ調査

本調査でデジタル化された原板画像、フィルムホルダー書き込み内容をもとに写真集の掲載頁を特定し、紙面に記述されている撮影場所、撮影日時などのメタデータを入力する。詳細は、5.4.4で後述。

コマ調査にあたっては、岩波書店元番号が掲載写真ごとに部分的に記された「岩波写真文庫原本」（図5および、図9を参照）を資料として受領しており、これらの番号のリスト化もあわせて行った。

リスト化の結果、『岩波写真文庫』全286冊に掲載されている写真の総数は約53,000点、うち岩波書店元番号の記されているものが約31,000点ある事が判明した。岩波書店元番号の記されている約31,000点については、本調査済みの原板に記載された岩波書店元番号と機械的な照合が可能である。

2019年8月より本調査済みの186本に対してコマ調査を行った結果、348コマが岩波写真文庫に掲載されたと判明した。この結果から、調査対象の原板約23,000本は岩波写真文庫の掲載写真の総数約53,000点の多くを含みうると推測される。

以上の確認作業により、岩波写真文庫原板資料群の優先調査範囲は、プラスチック製収納棚に収納されている約23,000本と決定した。

5.4.4 コマ調査作業詳細

コマ調査は、スキャンされた原板画像と、新聞・雑誌・写真集等の媒体に掲載された写真とを照合し、原板やフィルムホルダー、書籍に記載された内容等を集約し、写真の撮影日時、撮影場所、撮影者名などのメタデータをコマごとに記録する作業である。

コマ調査が完了した原板の情報は、「写真原板データベース」（<https://photo-archive.jp/database/>）および、ジャパンサーチ（<https://jpsearch.go.jp>）上で公開中である。

コマ調査は、資料群ごとに異なる原板の種別や、メタデータとして引用可能な記述の特質を考慮し、それぞれの資料群や掲載媒体の特徴に即した方法で行われる。

岩波写真文庫原板資料群は、原板資料、掲載媒体ともに数量が膨大である点が特徴であり、効率的な調査には複数人での分業化された調査が必要になる。本年度はコマ調査の効率化を目指し、作業を行いながら同時にワークフローの見直し・再構築を繰り返し、最終的に以下の通り調査を行った。

コマ調査のワークフロー

- 1) 掲載コマ特定
- 2) コマ画像切り出し
- 3) メタデータ入力

コマ調査作業の詳細

1) 掲載コマ特定

本調査済みの原板画像と写真集に掲載されている写真とを照らし合わせ、特定する作業である。岩波写真文庫全286冊に使用された写真約53,000点のうち約31,000点については先述の「岩波写真文庫原本」より作成した岩波書店元番号リストと照らし合わせることで効率的な特定作業が可能である。

2) コマ画像切り出し

特定されたコマ画像を、スキャン済みのコンタクト画像から画像処理ソフトを用いて切り出す作業である。

3) メタデータ入力

特定されたコマについて、名称（タイトル）、撮影日時、撮影場所、撮影者名、被写体分類といった情報を入力する作業である。

名称（タイトル）は、岩波写真文庫の本文からの引用を基本とする。撮影日時は、書籍の出版年、原板のエッジコードより判別されるフィルムの製造年、および被写体内容から読み取れる情報を入力する。

なお、コダック製原板のエッジコードについては「A Guide to Identifying Year of Manufacture for KODAK Motion Picture Films」(https://www.kodak.com/uploadedfiles/motion/Guide_to_Identifying_Year_of_Manufacture.pdf)を参照した。

撮影場所は、書籍のタイトル、キャプション、被写体内容から読み取り入力する。詳細な撮影日時や撮影場所が特定できる場合には、「Geoshapeリポジトリ - 地理形状データ共有サイト | ROIS-DS人文学オープンデータ共同利用センター (CODH)」(<https://geoshape.ex.nii.ac.jp/>)より、撮影時点での正確な自治体名を検索し、入力している。

撮影者名は、書籍の奥付やホルダーの書き込み、写真展情報等を元に入力している。岩波写真文庫の紙面には撮影者個人の名前が記載されていない場合が多く、撮影に関わった写真家が後年に開いた写真展や出版した写真集によってのみ、撮影者名が記録されている例も多い。

被写体分類は、被写体についてあらかじめカテゴリー分けされた「風景」「街角」「車」「人物」などの分類項目に沿って情報を付与する作業である。これにより、タイトルや撮影者がわからない写真についても、写真原板データベース上での検索を可能としている。



図5 岩波写真文庫 160 伊豆の大島 原本(表紙・裏表紙) 1955年8月25日発行



図6 照合・コマ切り済みのコマ画像

画面中央に写る元町港の開港は1953年であることから、この写真の撮影年は1953年より、書籍の発行年である1955年の間であると考えられる。

停泊している船は前方のドームや煙突の形から橘丸と推測される。手前に写る女性は「あんこ」と呼ばれ、頭に物を載せて運ぶさまは島嶼部に特有の文化である。左の島影は利島。

原板の下部に記された岩波書店元番号と、表紙左ページに記された番号が一致していることがわかる。

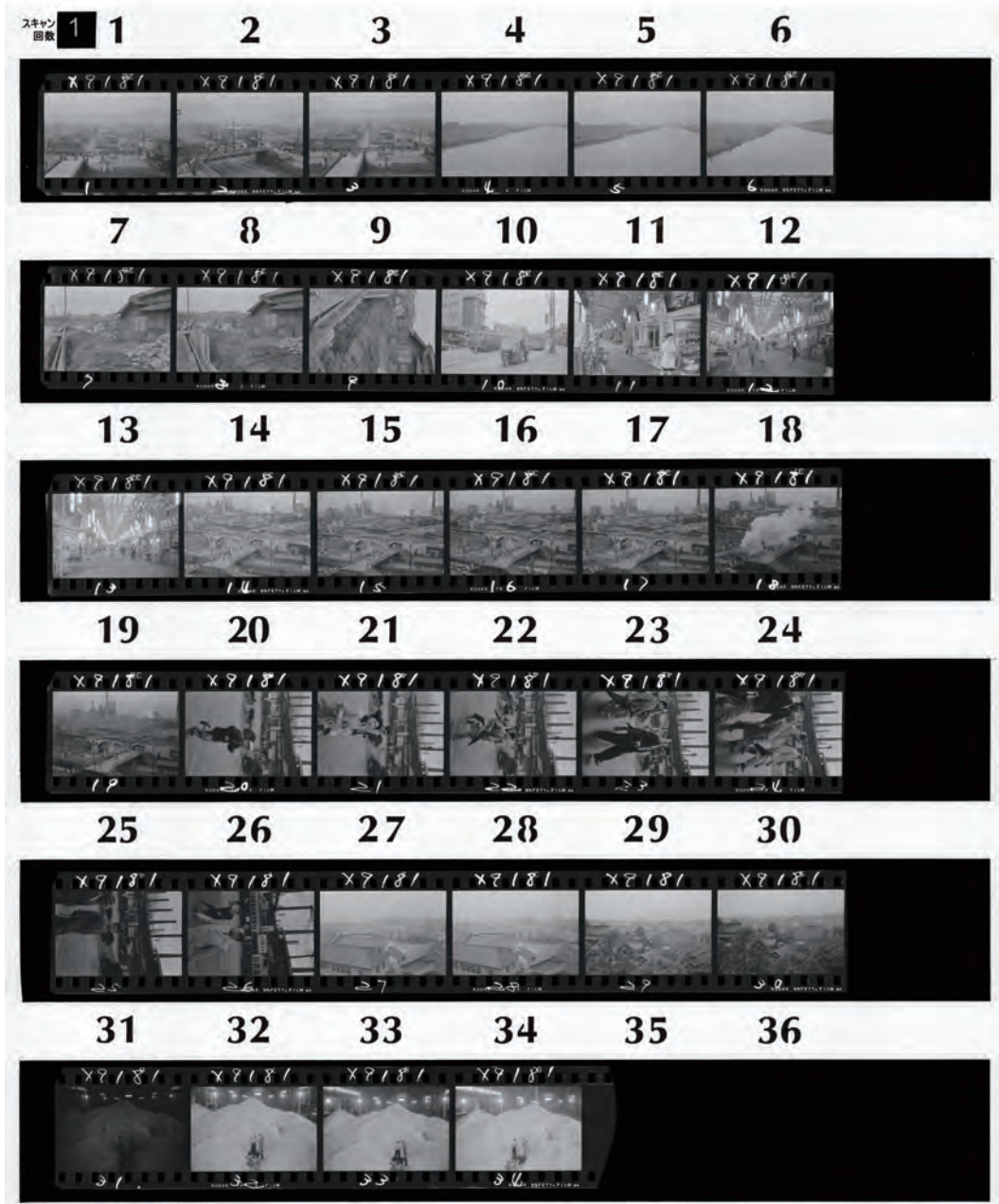


図7 コンタクト画像 コマの上下に岩波書店元番号が書かれている



図8 撮影場所が記されたネガホルダー 左下のシールはセンターで付与した受付番号「X9181」が岩波書店元番号



図9 写真ごとに岩波書店元番号が記された、岩波写真文庫原本。

巻数	書名	掲載頁	岩波書店元番号	照合済みコマ番号	タイトル	撮影地	撮影年	撮影者名
271	福岡県一新風土記一	表紙・裏表紙	X9181-18	00069-01936-0018	八幡製鉄所 八幡市	福岡県 八幡市	1958	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	1	X9156-2	00069-01912-0002	関門海底国道トンネルの門司側入口	福岡県 門司市	1958	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	2-3	X9149-25	00069-01905-0025	戸畑市の上空から見た洞海湾、北岸	福岡県 戸畑市上空	1958(推定)	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	4	X9180-29	00069-01935-0029	門司市街、背後には直ちに丘陵がそそぐ	福岡県 門司市上空	1958(推定)	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	4-5	X9139-9	00069-01895-0009	関門海峡に面した門司の市街、東北に	福岡県 門司市上空	1958(推定)	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	6-7	X9149-14	00069-01905-0014	洞海湾を挟む三市、手前が若松市、向	福岡県 若松市上空	1958(推定)	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	7	X9149-35	00069-01905-0037	洞海湾の奥に広がる八幡市は北九州	福岡県 八幡市上空	1958(推定)	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	8	X9154-23	00069-01910-0023	早稲の瀬戸、本州まで約500米、海底国	福岡県 門司市	1958	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	8	X9163-12	00069-01919-0012	小倉市は北九州地域の商業活動の中	福岡県 小倉市	1958	撮影者不詳
271	福岡県一新風土記一	8	X9162-17	00069-01918-0019	平尾台のカルスト地形、小倉駅から	福岡県 平尾台	1958	撮影者不詳

図10 岩波写真文庫原本よりリスト化された岩波書店元番号と、コマ調査により判明したメタデータ。
フィルムホルダーに記載された岩波書店元番号と照合することで、掲載コマを効率的に特定している。

5.4.5 まとめと今後の課題

膨大な写真原板資料の効率的な調査には、調査プロセスのマニュアル化と組織だった調査とが必要である。岩波写真文庫原板資料群の調査では、本調査に関して作業マニュアルを作成し、複数人での調査を可能にした。一方でコマ調査は、より効率的で的確な作業方法を模索している段階である。次年度以降は調査プロセスを更に整理し、分業化、複数人作業による調査の迅速化を図りたい。

岩波写真文庫は1950年代の日本の姿を今に伝えるばかりではなく、戦後間もない時代において「知」をいかに映像化し多くの人々に伝えるか、という挑戦の記録でもあるといえる。写真原板に写された過去の映像を、現代の利器によって未来に伝えるため、より洗練された調査方法を模索しながら次年度以降も調査を継続する。

5.4.6 岩波写真文庫 調査作業の経過

2017年7月20日 収集予定原板の収納状態を見学。分量等を確認し、収蔵計画立案。

8月23日 収蔵作業。

2019年4月11日 収蔵原板の約半数の23,000本を写真文庫掲載と仮定し、初期調査開始。

7月25日 初期調査終了。

7月29日 調査方針策定のための先行調査（本調査・コマ照合作業の試行）を開始。

9月19日 先行調査を終了 スキャン本数：186本、照合コマ：348コマ。

10月28日 コマ照合作業の効率化のため、原本に記載された記号の目録化を開始。

12月24日 原本に記載されたすべての写真の目録化が終了。

掲載写真の総数：約53,000コマ うち岩波元番号あり：約31,000コマ

2020年4月9日 本調査作業マニュアル 作成

4月15日 本調査を開始

4月17日 コマ調査を開始

2021年1月21日現在 本調査済み本数：7,492本、照合済みコマ数：5,171コマ

河原 健一郎（調査員）

5.5 渡辺義雄 写真界の重鎮の遺したもの（総括編）

5.5.1 初めに

渡辺義雄の写真原板の受入れは2015年から開始し2020年秋に終了し約25,000点を処理した。「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」報告書に4回に渡り渡辺義雄写真原板処理の進捗を報告してきた。今回、渡辺義雄の写真原板処理の総まとめとして、過去の報告書に記載した記事も修正加筆して掲載し渡辺義雄写真原板処理の全貌が見えるように構成した。本文の編集にあたっては公益社団法人日本写真家協会副会長の松本徳彦氏に助言を得て進めた。今後、渡辺義雄研究の一助となることを期待したい。

5.5.2 写真原板の受入れ

5.5.2.1 寄贈経緯

渡辺義雄は2000年93歳で他界し、それ以降写真原板の管理は小金井市で長男が行っていた。長男と親しい建築史家からは被写体となった建築物が帰属する寺社に撮影された写真原板を寄贈されたとの助言もあったようだ。長男は写真原板が散逸することを嫌いどこかにまとめてその写真原板を寄贈したいと考え、日本写真家協会の松本徳彦氏に相談をしていた。長男が2015年に早逝し、この管理を長女が引き継いだ。長男の意向を尊重する形で同年に日本写真保存センターに所有する写真原板及び資料を寄贈することになった。

日本写真保存センターは、渡辺義雄が長年会長を務めた公益社団法人日本写真家協会の内部組織である。運命的な縁で、渡辺義雄と関係の深い組織において写真原板を管理することとなった。

5.5.2.2 写真原板の概要

受入れた写真原板は終戦直ぐ（1945年8月以降）の銀座・横浜市・神戸市・三条市などの国民生活ぶりを撮影した未発表ものから、伊勢神宮の第61回式年遷宮（1993年）撮影あたりまで約50年間の写真原板及び関連資料、総数約25,000点となる。



図1 銀座 1946年



図2 桜木町駅前 1949年

その写真原板の撮影対象別の構成は、伊勢神宮・奈良六大寺（法隆寺、興福寺、唐招提寺など）・大和古寺（室生寺、浄瑠璃寺、当麻寺など）・日本の塔（日本各地120の仏塔）などの日本古建築がテーマのものが56%を占めている。「奈良六大寺大観」「大和古寺大観」は岩波書店から出版された学術的書籍で、その使用写真原板は岩波書店で永らく管理し、2017年当センターに寄託された。この同テーマの渡辺義雄寄贈分は岩波書店からの寄託分の控え写真原板となるものであった。また近代建築がテーマとなる、宮殿・迎賓館・帝国ホテルは24%となる。

渡辺義雄は、1932年ごろから写真家として活動を開始した。戦前に出版された印刷物は、「フォトタイムス」「スナップ写真の狙い方・写し方」「文楽」がある。1945年の東京大空襲で麹町の事務所は被災し、残念ながら戦前戦中の写真原板は全て焼失した。

5.5.2.3 写真原板の種別

受入れた写真原板の種類を調査すると以下ようになる。

- ・カラー / 白黒フィルム区分：カラーポジ49%、白黒ネガ44%、カラーネガ7%
- ・写真原板サイズ：4×5インチ 83%、5×7インチ 13%、120フィルム 1%、135フィルム 3%、大判構成率は96%。その中に少量のガラス乾板が含まれる。

大判（5×7、4×5）フィルムで撮影した写真原板が、受入れたものの中で多数を占め、対象はほぼ建築物となる。135フィルムは戦後の闇市などのスナップ、海外取材では120フィルムと併せて使われている。

5.5.2.4 受入れ前の保管状況

渡辺義雄は写真事務所を、四ツ谷駅近くのビルに構えていた。そこを閉じ、小金井の自宅兼事務所に写真原板及び資料類を移動し長男が管理したときは、大項目での分類はされたようだがそれ以上の整理は着手されなかった。フィルム包材はグラシン紙の物が多く、ビニール製のものは少数であった。この為、一部の年代の古いものには銀鏡が発生していたが、フィルムの劣化状況は概ね良いものが多かった。長男は保管している写真原板類が散逸しないように注意し管理していた。



図3 小金井宅写真保管状況

写真はプリントや印刷物が主体であり、最終成果物が出来るとその中間生成物である写真原板はその価値を顧みられることなく、貸出先にて紛失される事や戻ってこない事が起きていた。渡辺義雄は事務所に助手を置かず、撮影済みの写真原板を整理する余裕がなかった。事務所には出版社から戻り写真原板が入った封筒がうず高く積み上げられ渡辺義雄本人ですらどこになにかがあるか判らない状況であった。

さらに日本写真家協会会長・日本大学芸術学部教授・東京都写真美術館館長を始めとして色々な役職業務があり、多忙な状態が続き写真原板整理はやりたくてもできない状況であった。

5.5.2.5 受入れ調査

受入れた写真原板は、初期調査で全体概要を把握し、本調査では一点毎にデータ登録と中性紙包材に入替を行い、写真原板サイズごとに定形箱に収めた。印刷物に使用された写真原板が発見された場合そのメタデータと映像データと合わせて当センターの写真原板データベースにて公開をしている。

渡辺義雄の受入れた写真原板はどの印刷物に使われたかメモ書きされているものが少なく、約25,000点の写真原板の山から映像だけを頼りに、40冊を超える書籍に使用されたものと合致させるのには時間と労力のかかるものとなった。結果、印刷物の使用写真と合致できたものが約1,000点（合致率4%）となった。

5.5.2.6 写真原板の長期保存

2020年度中に受入れた全ての渡辺義雄の写真原板は、長期保存に最適な国立映画アーカイブ相模原分館フィルム保存庫に収めた。保存環境は温度10℃相対湿度35%の低温低湿で化学物質である写真原板の劣化を抑え、理論上は2～300年先まで良好な状態で保存できることとなった。



図4 国立映画アーカイブ相模原分館



図5 収蔵の様子

5.5.3 写真原板から分かったこと

5.5.3.1 撮影に使用された写真原板

使用フィルムは、1945年以降は白黒5×7のコダック、1955年以降はカラーは4×5のコダック（EKTACHROME ISO50）、白黒は4×5富士フィルムのパックフィルム（NEOPAN SS ISO100）が多くを占める。昭和後期から平成ではカラー撮影が殆どとなり富士フィルムのものが多くを占めるようになっている。

写真を撮影する際は仕上がりのバラつきを無くすため、同じ種類のフィルムを選択するのが常である。しかし渡辺義雄の写真原板にはアンスコ、デュポン、サクラなどのカラーフィルムも少量存在していた。

以下のフィルムは、左がコダック右が富士フィルムのもので、左上部の切り欠き（ノッチコード※）にて製造メーカーが判別できる。同一被写体を同アングルで違う種類のフィルムを使用して撮影した事例である。

恐らく、オリエンタル写真でフィルムの製品評価をしていた関係で、各社からフィルムの品質テストを依頼されたものではと推察する。

ノッチコード※：暗箱内作業で光が当たる乳剤面を指先で判別できるようにシートフィルムの上部に切り欠きを入れてあるもの。フィルムの種類ごとによりその切り欠きのデザインが異なる。



コダックフィルム

富士フィルム

図6 フィルム比較

5.5.3.2 伊勢神宮に見る写真の記録性

建築物は長く歴史の中に止まるものもあれば、取り壊されてしまったもの、また周辺環境の変化が生じたもの、建築後に意匠変更がされたものなどがある。

伊勢神宮は約1300年前より20年毎に（一時中断した時期あり）遷宮を行う。全く同じ新しい社殿に建て替え常若の思想を平安時代より現代まで綿々と繋げている。

渡辺義雄は伊勢神宮の遷宮を、第59回遷宮（1953年）・第60回遷宮（1973年）・第61回遷宮（1993年）と3回撮影を行なった。20年毎に遷宮する伊勢神宮において白木の状況や意匠は少しずつ変化している。写真を丹念に観察すると遷宮ごとに新しい社殿に建て替えるための木材（日本の檜）の節の数が増加しているさまが見受けられ、良材の調達が難しくなってきたものと推察する。

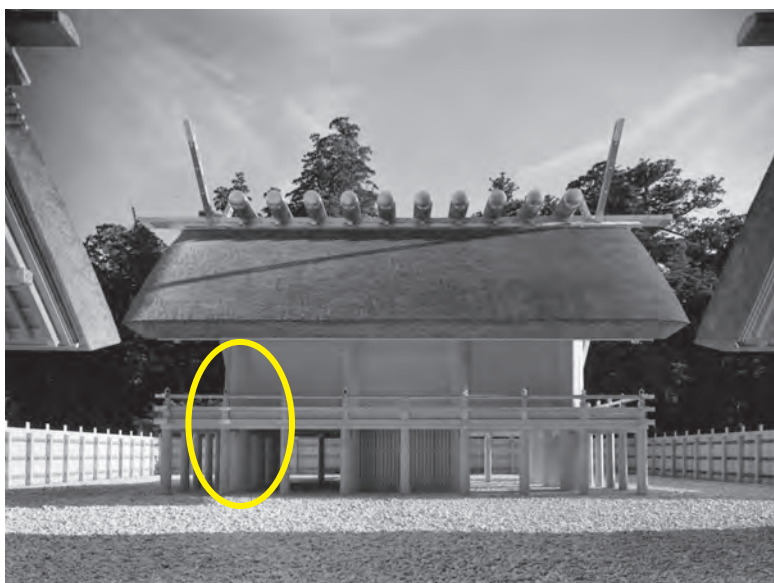


図7 内宮正殿北面(第59回遷宮)

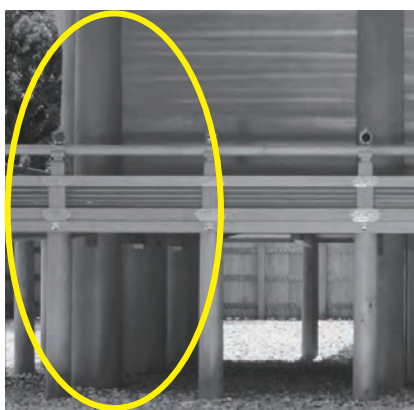


図8 内宮正殿北面(第60回遷宮)

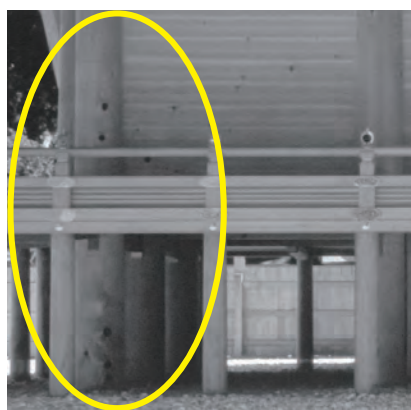


図9 内宮正殿北面(第61回遷宮)

また、第62回遷宮（2013年）では高欄の上に据えられている「居玉（すえだま）」の素材が、七宝から漆塗になった。明治時代初頭より艶やかさを求めて正殿の装飾に七宝の居玉や飾り金物を配置してきたが、原点に戻すとの考えから平安時代の伝統的なものになった。第60回遷宮（1973年）・第61回遷宮（1993年）に撮影した写真原板には変更前の5色の七宝で装飾された正殿が遺されている。

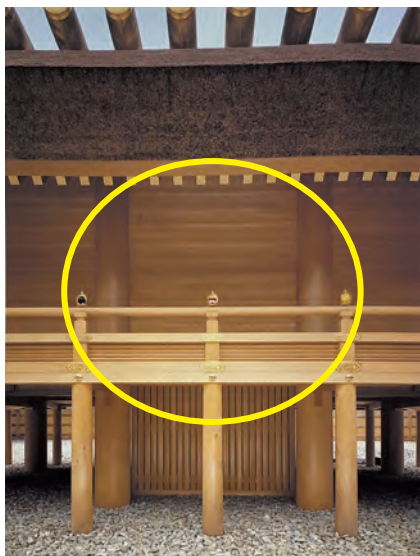


図10 内宮御正殿北側(第60回遷宮)

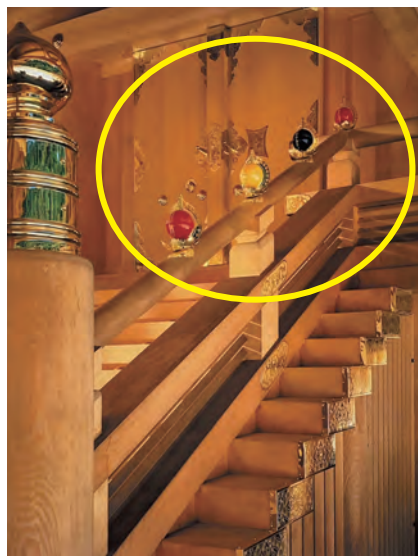


図11 木階の擬宝珠と居玉(第61回遷宮)

5.5.3.3 印刷物作成とトリミング

一般的に大判フィルムでの撮影はトリミングをしないことが基本である。この為、多くの印刷物ではトリミングをしたものは殆ど見つからなかった。例外的に「伊勢 日本建築の原形」丹下健三・川添登と渡辺義雄の共著では、丹下健三の意図で元々ノートリミングでの意図で撮られたフィルムを、大胆にトリミングされて使用された。(下図参照)



図12 内宮正殿正面(トリミング指示)



図13 トリミング後「日本建築の原形・伊勢」

また撮影期間が短い伊勢神宮の撮影では、画面すみに撮影クルーが映り込んでしまうことも避けられず後でのトリミング処理で加工するものもあった。トリミングの無い写真原板からは、渡辺義雄の構図力そして写真技術が対象物を一枚の写真に凝縮し揺るぎない完成形としていった姿が見て取れる。

5.5.4 渡辺義雄の建築写真

5.5.4.1 建築写真への傾注

渡辺義雄は30歳前後から建築写真に興味を抱き、戦後は一部のスナップを除き、建築写真に傾注して行っている。その第一歩となったのが美術評論家の板垣鷹穂との出会いとなる。板垣から新築された御茶ノ水駅を撮影してみないかと勧められ、陰影のコントラストを見事に使い立体感のある線と面で御茶ノ水駅を表現した。



図14 御茶ノ水駅(1933年)

それ以降、渡辺義雄自身が建築写真というカテゴリーに魅せられ、建築写真は写真技術の一つの高みであると確信していった。以下は、短期で終了した写真雑誌「写真文化」2号（1939年）に渡辺義雄が寄稿したものである。建築写真とは諧調の広い描写力を画面全体に求め建築物の使用された空気感も併せて写し込む技術を要求している。そして技術を磨き「写真術」を深めることが結果として良い建築写真となると論じた。

＜建築と写真＞ 渡辺義雄著

「優れた建築写真とは、必ずしも建築のよさではない。また建築のよさは、建築の豪壮さや、意匠の珍しさでもないことは勿論であろう。優れた建築写真の可き条件は多々あるが、先ず建築特有の形態意匠が説明的であること、その建築の用途、即ち工場は工場らしさ、住宅は住宅らしさがうかがはれなくてはならないこと、次に量的効果、即立体感の表現と、構造材料の質感の描写が充分に果たされること等が挙げられる。それには写真的に立派な諧調と、鮮鋭度が必要である。ここで建築写真ほど写真の諧調を尊ぶものはないと主張したい。人物写真とか、風景写真の場合は多少の缺陷は、主點の強調や、陽明部、或は暗部丈けの美しさによって償はれるものであるが、この場合、それは許されない。例えば室内を撮して、陽のあたつてゐる机の上丈が美しく描写されて、他の大部分の調子が落ちて、充分の説明を缺くやうな写真では、一種の芸術写真としては通る場合はあつても、完全な建築写真とは云い難いのである。建築写真とは画面の隅々まで細心の注意の下に仕上げられて、充分説明的であるために、鮮鋭な描写で美しい諧調を整へてゐなければならない。これ丈では単に無味乾燥な記録にとどまるかも知れないが、その選択された構図の中に、建築の性格から来る雰囲気は自然に表れて来る種類の写真がよい建築写真としての条件をある程度満足さすものであらふと思ふ」

—『写真文化』2号 1939年 国際報道写真協会—

後年、1994年の雑誌「サライ」のインタビューでは、建築が好きで撮る、そしてその建築の後ろにある関係した人々の思いを撮りたいと答えている。また撮らせて頂くという感謝の念と尊敬の念を抱きつつ祈るような気持ちでシャッターを切っていると語った。「写真術」の高みを極め、精神的な世界に入った老境の渡辺義雄であった。

5.5.4.2 建築家からの評価

寺社の建築写真で木の組物や構造体などが写真で見えることは、建築家・建築史家にとっては研究上重要なこととなる。渡辺義雄は建築家の要望を良く理解しそれに応えている。情緒的になるので雲は極力排除し、建築物が見えるままの姿に自然に写真にした。



図15 伊勢神宮外宮御正殿東側

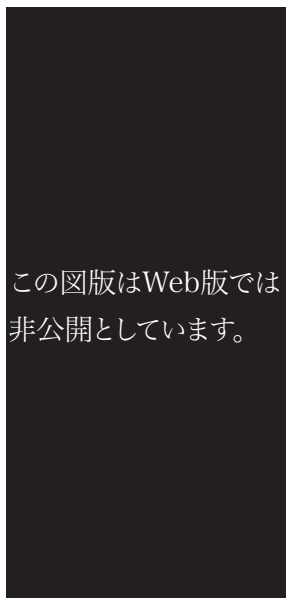


図16 醍醐寺五重塔側面

渡辺義雄は、昭和の名建築家である、堀口捨巳・丹下健三・前川國男・谷口吉郎などと交流があり彼らの要望を常に聞きまたそれを具体的に写真に留める高い技術があった。

1966年ごろ、岩波書店で企画された学術的な書籍「奈良六大寺大観」の建築撮影の担当として渡辺義雄が選任された。その編集委員で建築史家の太田博太郎は建築担当の写真家選任にあたって「写真という一つの手段を使って、建築の美しさを他の人に伝えてくれるものが欲しい。そしてできれば私たちの気が付かない新しい美を見つけてくれる写真家であって欲しい」(The Beauty of Japan Photographed The Japan Foundation 1998年 倉石信乃)と述べている。実物を正確に捉えそれを美のレベルまで昇華できる渡辺義雄の構図力や写真技術が高く評価された。

5.5.4.3 撮影機材と撮影方法

渡辺義雄の伊勢神宮遷宮の撮影助手を2度務めた山下圭一氏に渡辺義雄の使用機材と撮影方法について聞き取り調査を行い、使用機材・フィルム・撮影方法などが明らかになった。

第59回遷宮（1953年）は助手と2人

- ・カメラ：不明
- ・レンズ：3～4本
- ・フィルム：5×7モノクロ コダック

持参したコダックフィルムのサイズと国産のフィルムホルダーの大きさが数ミリ合わないことが現場で判明し、宿舍にてフィルムを剃刀で数ミリ削ることになる事態が発生した。

第60回/第61回遷宮（1973年・1993年）は5人の撮影クルーで構成し、機材はカメラと三脚以外に「レンズ用の箱」と「フィルム用の箱」2つを持って移動した。使用した機材とフィルム、撮影設定は以下の如く。

- ・カメラ：(60回・61回) ジナーS、リンホフ
- ・レンズ：(60回・61回) 48mm、65mmアンギュロン、75mmフジノン、90mmアンギュロン、120mmジンマー、150mmフジノン、180mmジンマー、210mm、240mmテレアートン

- ・フィルム：(第60回) 4×5カラーポジ コダック、
4×5モノクロ 富士フィルムのバックフィルム
(第61回) 4×5カラーポジ 富士フィルム
- ・絞り値：F32
- ・シャッタースピード：1/8秒
- ・フィルター：モノクロではオレンジを装着、カラーではフィルターの使用は無い
- ・その他：カラーの撮影では、露出を半段下げて控えカットを撮影した

渡辺義雄の身長は162cmで通常はその高さに合わせて三脚をセットし、その視点で撮影をしている。伊勢神宮の四重の垣の外から正殿側面を狙う為に、特注3m高の組立てアルミ三脚を用意し高い視点から撮影するという工夫もされていた。



図17 撮影風景(大判カメラのあおり)



図18 撮影風景(やぐらからの撮影)

5.5.5 渡辺義雄の写真界活動

渡辺義雄は、文化功労者(1990年)に選出された写真家である。昭和の時代が写真家活動の全盛期であり、2000年93歳で他界するまで精力的に写真家として活動を進めた。

渡辺義雄を語るとき、忘れてはならないのは、「建築写真の大御所」であるとともに、「写真家団体の会長」、「大学教授」、「東京都写真美術館館長」の職にほぼ平行して就いていたことである。写真家として作品作りをするとともに、写真家の地位向上として写真の著作権の保護期間の延長を衆議院文教委員会で参考人として意見陳述(1965年)するなど多方面でロビー活動を推進。それらの活動が礎となり、写真著作権の保護期間は死後50年まで延長(1997年)され他の著作物と同様の扱いとなった。更に後任がその櫓を受け継ぎ2018年の環太平洋パートナーシップ協定(TPP)加入とともに保護期間は死後70年となった。教育者として大学で指導をした当時の学生は、今では日本の写真界を背負う人材となった。写真文化啓発のための拠点作りとして東京都写真美術館の設立に関与しその後、写真美術館の開設は全国に広がっていった。その他名誉職も多数兼務した。

これだけ八面六臂の活動した写真家は渡辺義雄おいてほかに見つけることは難しい。渡辺義雄の写真表現にも表れる生真面目さ・頑固さ・理想を求める姿が、写真界の役回りでも変わらず、多数の協力者と伴に写真界周辺の環境を向上させていった。

5.5.6 著作の紹介

写真集に使用された写真原板がほぼ発見された4冊を以下に紹介する。これらは纏まった形で写真原板が見つかり印刷物の照合が比較的容易く出来たものである。

5.5.6.1 「モスクワの一日」

1956年に日ソの国交回復に伴い、その初期段階で社会主義国のプロパガンダとして多数の文化人を招聘する動きがあった。渡辺義雄も招聘団の一員として1956年5月25日にモスクワ訪問。一日で街の風景や人々をスナップ撮影した。第二次大戦後の当時共産国の首都モスクワで当局の規制もなく自由に生き生きとした生活を送る市民の様子を135フィルムで捉えている。渡辺義雄の不偏不党な人間愛を持った視点で社会主義国を撮影した。掲載写真の8割が発見された。



図19 ゴリキー通りの通勤者



図20 子供たち

5.5.6.2 「帝国ホテル」

旧帝国ホテルは竣工後すぐ関東大震災が襲った。奇跡的に大きな損傷もなくその後40年間に渡り使用した。フランクロイドライトの建築家として精力的に活躍した時期の作品で建築史的に価値が高い。旧帝国ホテルを建築資料的な視点で取り壊し前の1968年に撮影された。現在、愛知県犬山市の明治村に正面部分のみ移築されて歴史的建築物として残されている。この本の写真原板はほぼ全点発見されている。



図21 大食堂の石造持送りディテール



図22 中央宴会棟よりプロムナードへの階段

5.5.6.3 「伊勢神宮と伊勢路」

伊勢信仰は古くからあり、江戸・奈良・京都から伊勢神宮へ向かう道・道標・旅籠・関所が整備された。しかし近代化とともに、一つひとつ消えて行く歴史的なものをフィルムに遺すべく1979年ごろに撮影された。伊勢路43点・伊勢神宮30点（1973年撮影）。伊勢神宮にフォーカスして作成された書籍は多いが、伊勢路と言う参拝街道に光をあてた書籍は珍しい。スナップや建築写真など幅広く撮れる渡辺義雄の技術の広さを上手く引き出した写真集である。道中の風景は江戸時代のおかげ参りの信徒が見たであろう情景が取り込まれている。この本の9割の写真原板が発見されている。



図23 美杉村 上多気



図24 栗東町 旧和中散本舗

5.5.6.4 「日本の塔」

1980年ごろの北海道から大分県までの、120の仏塔（五重塔・三重塔・多宝塔）を数年かけ長男と共に自家用車で回って撮影したようだ。国宝・重文と著名な塔を4×5カラーフィルムで撮影。塔全景と初層などの木組み構造及び内部写真で一つひとつの塔が構成されている。ほぼ全点の使用写真原板が発見された。

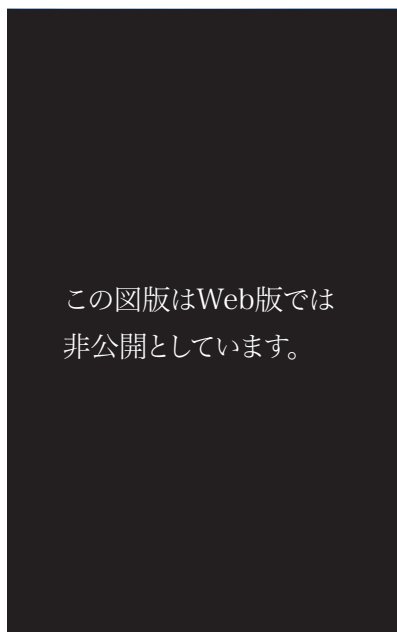


図25 醍醐寺五重塔

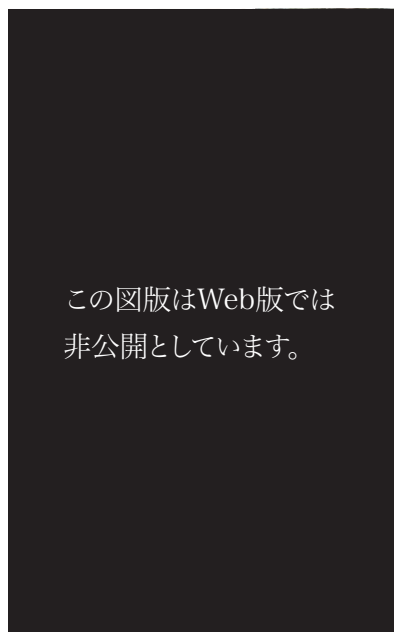


図26 浄瑠璃寺三重塔

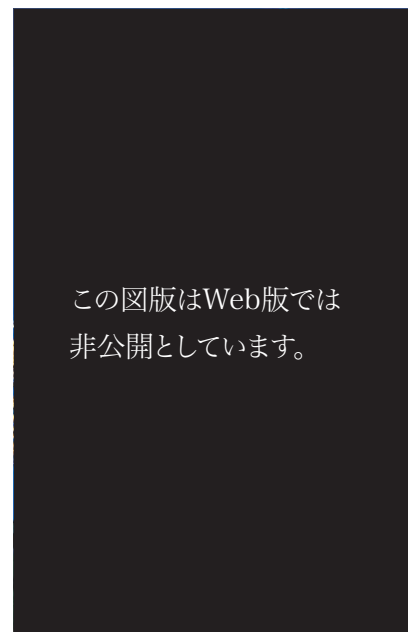


図27 最勝院五重塔

5.5.7 まとめ

ギリシャ神話のアキレスは死して名を遺し、ゴッホは死んでから名声を得た。作曲家メンデルスゾーンはバッハの作品に光を再びあて、忘れ去られたバッハを当時の人々に紹介し、改めてバッハの素晴らしさを世に広めた。近現代の写真家が後世にどれだけ名を遺せるだろうか。

写真術はフランスで発明（1839年）されてからオランダ船で日本に持ち込まれたのは天保14年（1843年）であった。そこから180年近く経過し、遺るべき写真の選別は時間とともに進んでいる。フィルムなどの感光材を使用した作品の後世に遺る条件は、写真自体の持つ力、そして写真原板の保存環境が重要な要因であろう。

渡辺義雄の力ある写真という点では、伊勢神宮の第59回遷宮（1953年）を歴史上初めてカメラがとらえた写真原板は端正で上品な建築写真として後世に遺るものであろう。それまで人を拒んできた伊勢神宮正殿の御垣内に初めて入り正殿と対峙した感動や興奮がそのまま写真原板に描写されている。5×7の大判写真で捉えたものは、後世の研究者が見ても、高い評価がされるものと考ええる。

渡辺義雄は昭和の時代の要請であるかの様に生まれてきた人物で、精力的な写真家活動とともに、写真家の地位向上（写真著作権の期間拡大）・後進の育成（大学教育）・写真文化の啓発（写真美術館設立）、を併せて推進し形を遺していった。

「何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」は鎌倉時代の西行法師が伊勢神宮で歌った短歌であるが、その伊勢神宮の遷宮を三度撮影した渡辺義雄の写真家としての実績そして写真界における業績を考えると、「写真界渡辺義雄の魁（さきがけ）のかたじけなさに涙こぼるる」と思わざるにはいられない。

渡辺義雄の50年間に渡る写真原板及び資料一式をご遺族から寄贈頂き、写真原板を直接見る機会を得て、写真家の知られざる側面に光を当てることが出来た。今後の写真原板収集においても、同様に写真家の生涯作品一式が集められることが望まれる。

この渡辺義雄の写真原板を処理した者として、この作業の傍ら伊勢神宮や関連寺社のことを勉強する機会を得て、副次的に日本文化の奥深さを改めて学べた、この点からも渡辺義雄に感謝する。



図28 渡辺義雄(木村恵一撮影) 1990年頃

渡邊 英雄(調査員)

6 本年度行った写真原板データベースの改良

日本写真保存センターでは歴史・文化的に貴重な場面を写した写真原板を後世に残すために写真原板の収集・調査・保存・利活用を行っている。これらの作業を効率的に行えるように写真原板データベース（以下DB）の構築と運用を行っている。

日本写真保存センターの写真原板DBは2つ存在する。1つは管理DB。これは写真原板に関する情報を記録するDB。管理DBで扱う情報は資料受入日、著作権、撮影者名、数量、サイズ、種別、撮影地、撮影日、劣化状態、個包材の書き込み、現在の保管場所、使用された画像のタイトル、写真原板の画像、被写体分類、掲載された印刷物のタイトル等々。様々な形態の写真原板に対応できるように数多くの項目が存在する。もう1つは閲覧DB。こちらは調査した写真原板のなかでこれまでに書籍や展覧会で発表された原板情報をウェブ上で閲覧できるようにしたDB（<https://photo-archive.jp/database/>）。管理DBでは数多くの項目が存在し、そのなかには個人情報などウェブ上で公開できない情報が存在する。そのため閲覧DBで扱う情報は撮影者名、サイズ、種別、撮影地、撮影日、写真原板の画像、使用された画像のタイトル、被写体分類、掲載された印刷物のタイトル等、管理DBの情報から公開に適した一部の項目のみとした。この2つのDBの構築は凸版印刷株式会社が提供しているデータベースシステム「SAI-CHI」を利用している。

管理DBは2015年度に基本的な部分の開発が終了（詳細は平成27年度報告書）。2017年度に岩波書店から受入れた大量の写真原板の調査を始めたところ、これまでの管理DBの構造では撮影者の情報の管理が難しいということが判明した。そのため、2018年度に管理DBの大幅な改良を行なった（詳細は平成30年度報告書）。その後も実際に管理DBで作業を行い、使用感を検証し必要な部分の改良を毎年行なっている。

閲覧DBは2016年12月からウェブ公開を始めた。閲覧DBも管理DBの改良に伴い表示項目の改良を行なっている。

6.1 本年度作業概要

本年度も実際の作業で使用感を検証し必要な部分の改良を行なった。改良点は大きく分けると次の3つ。

- ・人為的な入力ミスを減らすためにインターフェースの一部を変更
- ・写真原板の情報をより正確に管理するためにDBの動作変更、および項目の追加
- ・写真原板の公開設定をより細かく管理できるように項目の追加

これらの改良によりさらに迅速で正確な情報管理が可能になった。改良作業の詳細な内容については6.2本年度作業詳細で紹介する。

笛木 諭（調査員）

6.2 本年度作業詳細

6.2.1 日本写真保存センターデータベース開発について

昨年度は、データベース環境のリプレースとジャパンサーチへの対応を行うとともに、一昨年度の改修内容をベースに運用上の問題点の解決を目的とした検討、開発項目の選定を行い、開発を行った。

今年度は、昨年度実施できなかった検討内容をベースに、引き続き運用上の問題点の解決を目的とした検討、開発項目の選定を行い、開発を行った。

6.2.2 管理データベースの更新について

管理データベースについて、運用上の問題点の解決を目的とした検討を行った結果、一部項目に関して修正していくべき点が出てきた。

日本写真保存センターと細かく協議をし、実際に修正すべき項目とそうでない項目をより分け、また、実装方法の検討を行い、修正開発を行った。

6.2.2.1 修正点

下記の点について、修正が必要となった。

(ア) ストレッジボックスのマスター化：

従来のストレッジボックスの管理は、ホルダーごとに任意の値を入力する方式となっており、管理が複雑となっていた。今回、ストレッジボックスをマスター相当として取り扱う処理に変更することで、情報管理の適切化、容易化を実施した。

(イ) 原板サイズ区分2の挙動修正：

原板サイズ区分2の「5×7」をチェックした際に、現在は、原板サイズ区分1の「その他」が選択されるため、「大判」を選択するように修正を行った。

(ウ) 劣化状態項目の追加：

「変色」を新たに追加した。

(エ) コマ単位での公開・非公開選択の対応：

従来は資料群単位で一括公開、非公開を指定していたが、被写体などにより資料群としては公開可であっても、コマ単位で非公開にすべきものが存在するため、コマ単位での公開、非公開を選択可能とした。また、公開方法についても、画像を公開できるかどうかの選択も可能とした。

(オ) 同一の掲載媒体の複数個登録対応：

従来は1写真に対し同一媒体は1つまでになっているが、同じ写真で「タイトル・キャプション」の項目が複数ある場合があり、複数個登録への対応を実施した。

6.2.2.2 修正内容の定義

(ア) ストレッジボックスのマスター化

ストレッジボックスはもともと独立したテーブルで構成されており、従来より、マスターに近い位置づけの情報であった。したがって今回の対応では、マスターとしてのI/Fを実装することにより、マスター化を実現した。

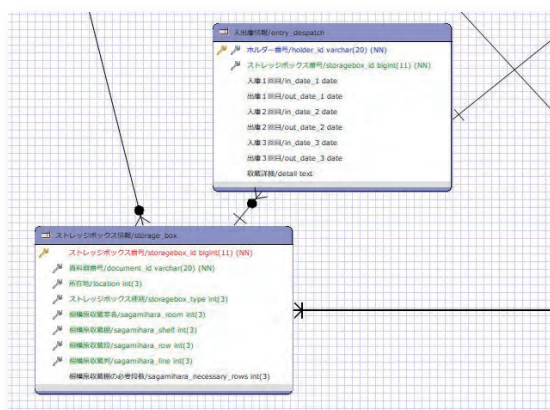


図1 storageboxテーブル周辺のER図

今まで各ホルダー画面で自由入力としていたストレージボックス番号の入力は新規登録画面からのみとし、ストレージボックス情報の変更はストレージボックス一覧画面より選択することで行えるようにした。

それにより、ホルダー画面では、既に登録済みのストレージボックスを選択するだけでよく、番号の入力間違い、書き変わりを防ぐことが可能となった。

ストレージボックスマスター登録

【資料群情報】

資料群番号 00001 資料群名 (資料群)大東元

【ストレージボックス情報】

ストレージボックス番号 所在地

ストレージボックス種別 相模原収蔵室名

相模原収蔵棚 相模原収蔵列

相模原収蔵段 相模原収蔵棚の必要段数

図2 ストレージボックス新規登録画面

ストレージボックス一覧

資料群番号 : 00001 資料群名 : (資料群)大東元

ホルダー番号 : 絞り込み 詳細条件を絞り込む 検索条件設定

15件のデータがあります。(3 件から 15 件までを表示)

ストレージボックス番号	資料群名	ホルダー番号	所在地	ストレージボックス種別	相模原収蔵室名	相模原収蔵棚	相模原収蔵列	相模原収蔵段	相模原収蔵棚の必要段数	操作
100001	(資料群)大東元	00001-00001 00001-00006 00001-00007 00001-00008 00001-00009	相模原フィルムセンター	その他	105	68	30	F	999	ストレージボックスマスター 資料群一覧 ストレージボックス削除
100002	(資料群)大東元	00001-00057 00001-00058 00001-00059 00001-00060 00001-00061	相模原フィルムセンター		103	2	4	A		ストレージボックスマスター 資料群一覧 ストレージボックス削除

図3 ストレージボックス一覧登録画面

入庫 撮影者

ストレージボックス番号 100001 相模原フィルムセンター

ストレージボックス種別 100001 相模原収蔵室名 105

相模原収蔵棚 100002 相模原収蔵列 F

相模原収蔵段 100003 相模原収蔵棚の必要段数 999

1回目 入庫 2012-10-04 31 出庫 31

3回目 入庫 31 出庫 31

図4 ホルダーマスターのストレージボックス選択画面

(イ) 原板サイズ区分2の挙動修正

原板サイズ区分2の「5×7」をチェックした際に、現在は、原板サイズ区分1の「その他」が選択されているが、本来は「大判」が選択されるべきだったため、そのように修正を行った。

原板サイズ区分1

☐ 135 ☐ 中判 ☒ 大判 ☐ その他

原板サイズ区分2

☐ ハーフ判 ☐ 35mm判 ☐ 6×4.5判

☐ 6×6判 ☐ 6×7判 ☐ 6×8判

☐ 6×9判 ☐ 名刺判 ☐ 手札判

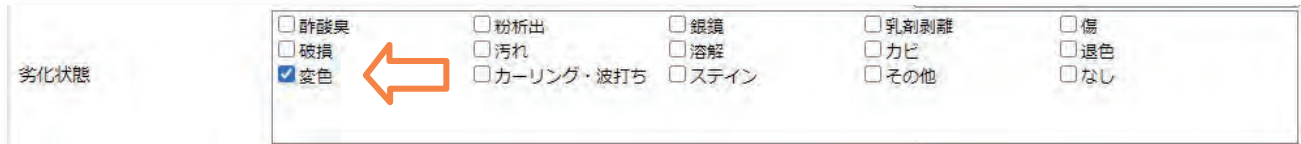
☐ キヤビネ判 ☐ 4×5判 ☒ 5×7判

☐ 8×10判 ☐ その他

図5 ホルダーマスターの原板サイズ区分選択画面

(ウ) 劣化状態項目の追加：

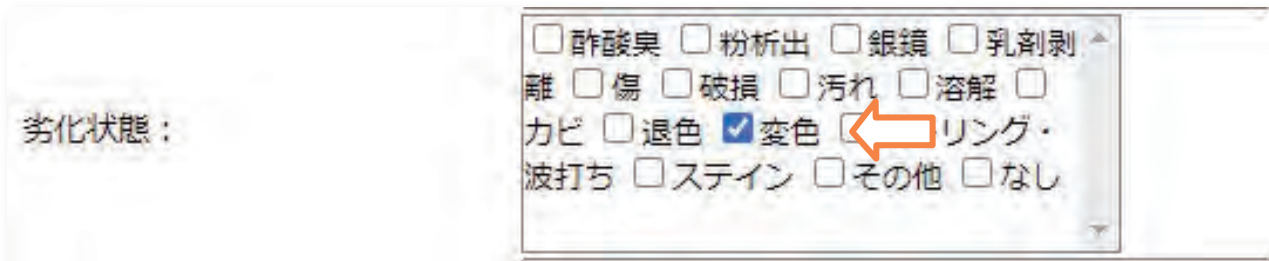
劣化状態項目に「変色」を新たに追加した。



劣化状態

☐ 酢酸臭	☐ 粉析出	☐ 銀鏡	☐ 乳剤剥離	☐ 傷
☐ 破損	☐ 汚れ	☐ 溶解	☐ カビ	☐ 退色
☒ 変色	☐ カーリング・波打ち	☐ ステイン	☐ その他	☐ なし

図6 ホルダーマスターの劣化状態項目選択画面



劣化状態：

☐ 酢酸臭	☐ 粉析出	☐ 銀鏡	☐ 乳剤剥離
☐ 傷	☐ 破損	☐ 汚れ	☐ 溶解
☐ カビ	☐ 退色	☒ 変色	☐ リング・波打ち
☐ ステイン	☐ その他	☐ なし	

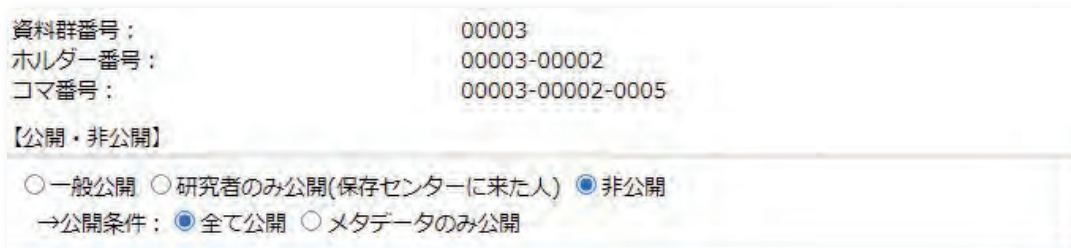
図7 コママスターの劣化状態項目選択画面

(エ) コマ単位での公開・非公開選択の対応

資料群単位での公開、非公開の選択はそのまま残し、新たにコマ単位での公開、非公開を個別に設定できるようにした。不慮の公開を防ぐため、コマ単位ではデフォルト非公開とし、また、資料群とコマがともに公開状態でなければ公開可とはみなさないようにした。

また、公開状態については、画像のみ非公開が選択できるようにし、写真の存在自体は検索してもらえるようなことも可能にした。

また、移行措置として、現状で非公開とすることが決まっているものについては、あらかじめ一括で非公開処理を行った。



資料群番号： 00003
ホルダー番号： 00003-00002
コマ番号： 00003-00002-0005

【公開・非公開】

☐ 一般公開 ☐ 研究者のみ公開(保存センターに来た人) ☒ 非公開

→公開条件： ☒ 全て公開 ☐ メタデータのみ公開

図8 コママスターの公開・非公開選択画面

■コマ画像

撮影者・団体		撮影者：渡辺 義雄
撮影年月日		1932年
撮影場所		日本
名称情報	名称	徳田秋声 1932 ビンテージプリント
	かな	とくだしゅうせい 1932 ひんてーじぷりんと
	英文	
掲載媒体情報1	掲載媒体	渡辺義雄の世界 人・街・建築への視線, 東京都写真美術館, 1996年, 東京都写真美術館 (p.21)
	タイトル・キャプション	徳田秋声 1932 ビンテージプリント
	かな	とくだしゅうせい 1932 ひんてーじぷりんと

図9 公開用データベースでの画像のみ非公開の表示イメージ

(オ) 同一の掲載媒体の複数個登録対応

1写真に対し同一媒体は1つまでになっていたが、複数個登録への対応を実施した。

詳細	被写体分類	掲載媒体	撮影者
----	-------	------	-----

媒体を検索して追加

掲載媒体	タイトル・キャプション	ページ1	ページ2	ページ3	
しらさぎ	CT ← 英文				削除
しらさぎ	CT ← 英文				削除

図10 コママスターの掲載媒体登録画面

6.2.2.3 管理データベースの今後について

今回の対応で昨年度からの課題となっていた運用、機能面での一定の改善、安定化が見込まれるため、管理データベースの今後としては、さらに運用、機能面で、以下の課題への対応展開が考えられる。

- ・ 受入情報管理拡充
- ・ 保管情報管理拡充
- ・ 管理用データベースから閲覧用データベースへのデータ更新機能の付加
- ・ 他館連携に伴うデータベース構造の検討
- ・ 業務従事者の作業効率化

6.2.3 閲覧データベースの開発について

昨年度は管理データベースの構造変更に伴う表現変更と、ジャパンサーチとの連携を行うための修正を行った。

今年度は、公開方法の多様化に伴う画面の対応と、運用利便性の向上のための修正を行った。

6.2.3.1 修正点

下記の点について、修正が必要となった。

(ア) 管理用DBの変更：

変更に伴う表示内容の修正を行った。

(イ) 公開用データベースのページフッタのメンテナンス容易化：

現在は、ページフッタの文言はプログラム内で設定されているが、今後、公開方針が変更になった場合、迅速に文言を変更できるようにするため実施した。

6.2.3.2 修正内容の定義

前述の修正点について、下記のように修正内容を定義し、作業を行った。

(ア) 閲覧用データベース 詳細画面について

コマ単位での公開非公開の出し分け、画像のみ非公開に対応した。(図9)

(イ) 閲覧用データベースのページフッタのメンテナンス容易化

フッタ部分を外部読み込みにし、ファイルの差し替えにより文言が変更できるようにした。

◆画像検索
 撮影者・団体名 撮影者・団体一覧 撮影年代 ~ 写真掲載媒体名 写真掲載媒体一覧 撮影地 国 地域

◆カテゴリ検索
☐ 風景 ☐ 建築物 ☐ 産業 ☐ 交通 ☐ 工芸・芸術 ☐ 動植物・自然 ☐ 人物 ☐ 社会・文化・風俗 ☐ 事件・災害・戦争

◆キーワード検索

◆表示順 撮影年: ☒ 昇順 ☐ 降順

検索 クリア

当データベースのすべての情報について、無断での転載・転用は禁止いたします。

図11 閲覧用DB フッタ

6.2.3.3 閲覧用データベースの今後について

閲覧用データベースの今後として、以下の課題への対応展開が考えられる。

- ・現状ではコンタクト画像の表示だけに関わるログイン機能の拡充
- ・他館連携方法について横断検索APIなどの検討

6.2.4 日本写真保存センターデータベースの今後について

今年度は、昨年度から引き続き運用上の問題点の改善を行うとともに、ストレージボックスのマスター化という運用の効率化につながる対応を行った。今後は、コロナ禍での作業も見据えた、業務従事者にわかりやすい運用、操作感を備えたシステム開発が求められるであろう。

高瀬 博司 (凸版印刷株式会社 トッパンアイデアセンター 関西TIC本部 ICTソリューション部)

松本 亜須花 (凸版印刷株式会社 情報コミュニケーション事業本部 ソーシャルイノベーション事業部 営業本部 第三部 社会政策営業チーム)

寺師 太郎 (凸版印刷株式会社 文化事業推進本部 アライアンス開発部)

小宮 広嗣 (凸版印刷株式会社 情報メディア事業部 クリエイティブ本部 ビジュアルクリエイティブ部)

7 情報発信、その他

7.1 本年度の情報発信と利活用

本年度は、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大により、写真展の開催およびセミナー等の活動は見送った。一方で、調査情報を広く閲覧に供し、より多くの人々に活用していただくことを課題とし、閲覧DBでの公開情報の充実を図った。また、2019年8月より正式版が公開された、国の分野横断統合ポータル「ジャパンサーチ」へのデータ連携も引き続き行っている。

利用については、2020年度前半は経済活動の落ち込みにより件数が少なかったが、後半になってから増加した。

7.1.1 ウェブサイト

ウェブサイト（<https://www.photo-archive.jp>）では、日本写真保存センターでの写真原板保存・アーカイブ化の取り組みを紹介するほか、写真原板データベース（閲覧DB）の更新情報を発信するなど活動報告を行った。また、https（常時SSL）化を行い、セキュリティ対策の強化を行った。

7.1.2 写真原板データベース(閲覧DB)

閲覧DBの掲載コマに6,346コマを追加し、合計13,099コマとなった。

追加掲載コマ情報の詳細

写真家名	コマ数	掲載媒体
日本工房	1	岩波写真文庫『戦争と平和』
中村由信	1	『日本方言図鑑』
渡辺義雄	160	『日本の塔』ほか
辻本満丸	1	『日本植物油脂』
岩波写真文庫	4,803	『伊豆の大島』『東京』『馬』『京都府』『島根県』『岩手県』ほか
山口直	1,291	『日立 技術史の旅』
笹本恒子	89	『100歳のファインダー』
2020年度新規公開合計	6,346	
2020年度公開コマ数合計	13,099	

閲覧DBの本年度のPV数は12,141件、UU数は1,543人であり（2020,4,1～2021,2,28）、月平均PV 1,103件、UU140人であった。昨年度の月平均PV847件、UU59人（2019,4,1～2020,3,31）と比較して、月平均PV数1.3倍、UU数2.3倍と大きな伸びを見せた。増加の要因としては、ジャパンサーチの正式公開による閲覧者流入の増加が原因であると考えられる。

7.1.3 ジャパンサーチとの連携

本年度も引き続き、ジャパンサーチとの連携を行った。ジャパンサーチとの連携は、写真原板データベース（閲覧DB）の公開データをジャパンサーチ向けに変換しアップロードすることにより行っている。2020年8月25日のジャパンサーチ正式版公開後、webメディア、SNS等で大きな反響を呼ぶと同時に、公開DBの閲覧者数も増大した。

7.1.4 展示

日本写真保存センター作業分室（台東）では、所蔵している写真原板からプリントをした作品の展示を行なっている。現在は名取洋之助、江見写真館、佐伯義勝、南良和、山崎治雄、浅野隆、吉田潤など計18点の作品を展示している。

7.1.5 利活用

渡辺義雄、片山攝三、笹本恒子、恒成一訓、岩波文化財写真、岩波写真文庫、写真協会などの写真原板の利用希望が、出版社、新聞社、放送局、自治体、美術館などからあった。

利用目的は、雑誌や写真集掲載、写真展や展示会、イベントでの掲示、新聞記事、テレビ番組など多岐に渡っており、年々増加傾向にある。

河原 健一郎（調査員）

山崎 正典（事務局長）

8 支援組織

日本写真保存センターは、2006年に設立発起人会を開催して、「日本写真保存センター設立推進連盟」を設立したところから始まる。代表には森山真弓、副代表に田沼武能が就任して文化庁に「設立要望書」を提出し、文化庁は日本写真家協会に「我が国の写真フィルムの保存・活用に関する調査研究」を委嘱事業として予算化（約900万円）が開始された。2007年からは活動が本格化し、調査の為フランス・イギリス・アメリカ等の施設調査も実施した。2011年から「文化関係資料のアーカイブ構築に関する調査研究」（約1,800万円に増額）に発展し、収集・保存調査の他にアーカイブ構築に関する調査にも着手した。これまでに収集・保存調査を終えた写真原板を2012年には文化庁から貸与を受けた「国立映画アーカイブ相模原分館」の収蔵庫（125m²×4部屋の合計500m²に室温10℃、相対湿度35%）に収蔵できる事になった。そして2014年に写真原板の調査研究をサポートする支援団体の組織を立ち上げ、本支援組織も2020年度で7年目に入った。支援組織の設立から現在までの経過と現状について報告する。

8.1 日本写真保存センターと支援組織について

保存センターが取り扱う写真原板の数量増加により、文化庁からの調査研究費のみでは調査活動に限界が有るため、「日本写真保存センターの事業活動に賛同して活動を支援いただくための組織」を2014年に設立した。

保存センターの活動を写真関連業界中心に支援いただく為、キヤノン株式会社、株式会社ニコン、富士フイルム株式会社の3社が幹事社となって公益社団法人日本写真家協会の賛助会社を中心に支援組織会員への参加を呼びかけた結果、賛助会社として写真や印刷に関連する企業や団体から賛同が頂け、2020年度では12社1団体の13会員に支援いただいている（以後はキヤノン、ニコン、富士フイルムと略称表記）。

■ 支援組織会員（2021年3月時点 12社・1団体の13会員）

株式会社アイデム

エプソン販売株式会社

OMデジタルソリューションズ株式会社（旧 オリンパス株式会社）

株式会社キタムラ

キヤノン株式会社

株式会社シグマ

株式会社写真弘社

株式会社タムロン

凸版印刷株式会社

株式会社ニコン

一般社団法人日本写真著作権協会

富士フイルムイメージングシステムズ株式会社

株式会社フレームマン

（50音順）

8.2 支援組織の経緯について

- 2013年06月 支援組織準備の3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）と協議会
2014年01月 支援組織立ち上げ及び保存センター実務責任者をキヤノンから派遣
2014年05月 公益社団法人日本写真家協会の賛助会員に説明会実施
2014年10月 支援組織会社12社による初の「支援組織会議」を開催
2015年04月 支援組織が14会員となる（1社・1団体が増）
2015年08月 「原爆展」（展示：JCIIサロン）に支援会社が協賛
2016年04月 支援組織が13会員となる（1社が減）
2016年11月 「渡辺義雄展」（展示：ポートレートギャラリー）に支援会社が協賛
2017年03月 保存センター実務責任者が支援会社のニコンから着任し責任者交代
2017年06月 「東京国立近代美術館フィルムセンター相模原分館」見学会に支援会社3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）から10名が参加
2018年03月 「後世に遺したい写真」（展示：みなとみらいギャラリー）に支援団体が協賛
4日間の写真展開催に約7,000名が来場
2018年06月 「国立映画アーカイブ・相模原分館（2018年4月に独立）」見学会に支援会社4社（凸版印刷株式会社、オリンパス株式会社、株式会社写真弘社、株式会社キタムラ）と文化庁から合計10名が参加
2018年10月 「後世に遺したい写真」写真展・講演会（光村グラフィック・ギャラリー）
10月25日～11月24日の開催期間中1,100名が来場
2019年01月 「日本写真保存センター作業分室」を日本写真著作権協会の支援により台東区台東に開設
2020年03月 保存センター実務責任者が支援会社の富士フイルムから着任し責任者交代

8.3 支援組織の支援内容について

今年度は新型コロナウイルスの感染拡大により2020年4月に初めて緊急事態宣言が発令されて以降、経済活動が大きく落ち込み、支援組織の会員企業も事業活動の制限により業績面への影響が大きい年度となった。そのような状況下でも「日本写真保存センター」の活動意義にこれまでどおり賛同いただき、支援継続いただいたことに感謝申し上げる。

支援組織から「日本写真保存センター」への会費支援は、具体的には調査作業室の整備、調査員の活動費、原板の長期収蔵の為の包材費、備品調達などの費用に補充している。また日本写真保存センター調査活動を広く広報する為の、セミナーや講演会、研究会などの活動費や各種資料、図録などの印刷宣伝費などにも使用している。

支援組織の3社（キヤノン、ニコン、富士フイルム）については、事業運営に必要な要員支援を受けている。具体的には3社のうち1社からほぼ3年ごとに常勤の管理者（事務局長担当者）1名を日本写真保存センターへ派遣いただき、日常の管理業務を依頼している。過去の実績として、キヤノンより2014年1月から2017年4月まで、ニコンより2017年3月から2020年3月まで、2020年3月からは富士フイルムより後任の事務局長が派遣されている。

8.4 支援組織の「台東作業分室の設置」支援について

日本写真保存センターは、「日本写真保存センター作業分室」として、2019年1月15日より、台東区台東に主要作業を行う職場を半蔵門本部から移転した。移転先は「一般社団法人日本写真著作権協会」が家主と契約して同協会より借用している。ワンフロア内に作業スペースや大量に寄贈された写真原板の仮保管スペース、ギャラリースペースがあるため、作業効率が大幅に向上した。ギャラリースペースでは臨時の写真原板調査作業や会議も実施している。

今年度は新型コロナウイルス感染拡大でテレワーク推進が求められたが、当センターでは写真原板自体を取り扱いながら調査作業を進めるため、調査員は常時出勤しての作業を行った。幸い作業スペースには距離的ゆとりがあり、感染対策を行いながら業務を進めている。

8.5 日本写真保存センターの課題と支援組織の今後について

今年度も日本写真保存センターの活動状況やフィルム原板保存の必要性について、より広く理解いただくため、支援組織メンバーの「国立映画アーカイブ相模原分館」や「保存センター台東作業分室」の見学会、原板保存に関するセミナーなどの広報活動を計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大により、対外行事を見送ることとなってしまった。

しかしながら、今後も“写真原板の保存と利活用に関する啓蒙活動”は、同じ価値観を共有する支援組織の協力もいただきながら継続的に実施していくことが重要である。

日本写真保存センターの活動は収集した写真原板そのものの長期保存とアーカイブ構築による利活用であるが、原板保存においては調査作業が進むにつれて包材に掛かる費用が大幅に増大してきている。アーカイブ構築の面ではフィルム原板のスキャンデータネットワーク上で管理するためのサーバー設置や管理費用、そして原板を管理するソフトウェアや利活用の為の公開サイトの改修など、ますます経費が膨らむ状況にある。

収集した写真原板数は累計で34万本を超え、未処理数がまだ約23万本あるなかで、調査員の人数も十分とは言えない。

今後も日本写真保存センターの活動が滞ることがないよう、更に支援組織会員数の増加や多方面から寄付を募るなどの新たな活動方法を検討していきたい。

山崎 正典（事務局長）

9 まとめ

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の蔓延で、全国民が自粛し日常生活だけでなく、企業活動から各種のイベント、スポーツ競技に至るあらゆる活動の自粛要請があり、活動の休止が続き、多くの活動や研究が滞る事態になった。

保存センターの活動も同様で、原板の収集作業や調査活動が一部休止せざるを得なくなった。遠隔地からはやむを得ず、現地調査をやめ、収集原板を宅急便で送ってもらうなどして、収集・保存に努めた。しかし、現地での聞き取り調査が出来ず、次年度に調査の継続をすることにした。

とくに明治から大正期に掛けて岡本東洋が撮影した犬猫、鳥類などの生態写真や織物や焼き物などの下絵として販売された京都の芸艸堂のガラス乾板の調査活動が中断したことは残念だった。

1959（昭和34）年9月伊勢湾台風の災害状況を約1週間にわたって記録した佐伯義勝のフィルム13本が名古屋市南区図書館から返納され、当時の生々しい状況を残すことができた。

サン写真新聞で活動していた渋谷高弘が戦後の市民生活をドキュメントした一冊の東京「昭和写真帖」は、羽田空港国際線旅客ターミナル開業時の日本航空の客室乗務員を撮った写真など貴重なものが多い。

女性誌を賑わした写真家清宮由美子の「日本のどこかに」も忘れ難い作品群であるが、残念ながらそこに使われた原板は散逸していて数点しか発見できなかった。

2020年度末に市川市八幡神社の農具市を撮影した山崎美喜男（元JPS会員）の写真原板を入手した。収集本数はわずか4本だったが、郷土の民俗史料として貴重なものとして受け入れた。

今般、調査員の渡辺英雄が数年前から継続して調査していた岩波書店の「奈良六大寺大観」や「大和古寺大観」と宮内庁関係の建造物の写真で定評のある渡辺義雄の写真原板の調査を終え、長文の報告をまとめ上げたので、これを本報告書「5.5 渡辺義雄 写真界の重鎮の遺したもの（総括編）」で披露することにした。

2018年に改正された著作権法で「授業目的公衆送信補償金制度」が施行されるとのことで、写真保存センターが収蔵している写真家の写真原板（アーカイブ）の利用が始まろうとしている。保存センターの活動の中心は物故写真家が撮影した貴重な写真原板の収蔵・保存であるが、写されている画像が貴重で、教育目的に利用されることは、歴史資料の活用という意味で大事である。「ジャパンサーチ」にしるアーカイブの利活用をもっと知らしめ、貴重な資料の有効利用を推進したい。

「写真は時代を映す鏡であり、歴史の証人である」ことを力説したい。

松本 徳彦（公益社団法人日本写真家協会副会長）

本年度受け入れた写真家の作品

芸艸堂



白鳥 撮影：岡本東洋



歴史風俗写真 撮影者不詳 1939年(推定)

本年度受け入れた写真家の作品

渋谷高弘



日本航空DC6B 羽田空港 1955年



旅立ちを見送る 東京駅 1954年



傷だらけの銀座四丁目 1954年頃

本年度受け入れた写真家の作品

清宮由美子



ユッ平 1960年ごろ



屋台で雑煮を味わう人々 1960年ごろ



橋の下の生活 1960年ごろ

本年度受け入れた写真家の作品

山崎美喜男



拝殿前の賑わい2 1961年



猿の太鼓たたきおもちゃ屋 1961年

佐伯義勝



伊勢湾台風 1959年



伊勢湾台風 1959年

禁無断転載

令和2年度 文化庁

「文化関係資料のアーカイブの構築に関する調査研究」

報告書

令和3年3月 公益社団法人日本写真家協会

〒102-0082 東京都千代田区一番町25 JCHビル

TEL:03-3265-7451 FAX:03-3265-7460

<http://www.jps.gr.jp>

E-mail:info@jps.gr.jp